
天使の恋

エンデバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の恋

【Nコード】

N7213D

【作者名】

エンデバー

【あらすじ】

大天使から下された命。 下界で勉強して来い エデン 楽園から、下界に降り立った天使。天使は一人の女の子に恋してしまう。禁じられた恋。掟破りの天使。叶わぬ恋と束縛された恋愛に苦しむ天使。下界で経験する様々な出来事が、次第に天使の心を動かしてゆく。恋する天使は、素直な想いを告げられるのだろうか。

第1章 1

五時限目の現代文の授業だった。はげ頭の、メガネをかけた国語の教師が『舞姫』を音読していた。クラスの連中は、一応教科書に目を落としているようだが、真面目に聞いている者は少ない。露骨に眠そうな顔をしている者が何人かいる。

甲斐谷俊は頬杖をつき、ぼうつとグラウンドを眺めていた。彼もまた真面目に授業を聞いていない一人だ。グラウンドでは体育の授業をやっているらしく、紺のジャージを着た男子生徒たちがサッカーをしている。女子生徒は隅のテニスコートで、テニスをしている。

俊にとって、下界の学問はつまらないものばかりだった。今まで授業でやってきたことは、全て既に身につけている知識だった。そのため中間テストや学期末テストは、百点満点でいつも学年トップだった。

天界で研究を重ねた自然界の摂理と下界の知識は、だいたい研究し尽くしていた。そのため学問において、新たな発見はまず望めないだろう。

問題なのが、人間の心理だった。これは、天界で研究を重ねてもわからないことがいくつもあった。いや、わからないというより、読めないと言ったほうが正しいのだろうか。

天界では人間の心理について、できる限り研究してきた。そして、俊なりにいくつもの心理的行動パターンを見出した。人間がその状況に陥ったときに、どういった行動パターンをとるかというものだ。たいていの人間は研究結果の通りに行動していた。だが、例外というものが存在した。はつきりとした答えが存在する学問では有り得ないことである。天使たちは必死になって、その例外の行動を分析した。しかし、結局答えを見出すことはできなかった。

更にそれが天使たちを悩ませたのは、例外が一つだけでなく、どの行動パターンにも存在したという点だ。その行動一つ一つが、天

使たちを驚かせたと同時に、頭を抱える材料でもあった。材料は増えるばかりで、解決したものは何一つなかった。

下界に来て、それも解決できるかもしれないと俊は思っていた。どうやら、人間の行動はその時々感情に影響しているようだ。自らの感情のコントロールができなくなり、自分でも起こしえない行動を起こしてしまうときがある。

だが、感情、と一口に結論を出すことはできない。まだまだ人間の深層心理は深いものだ。と俊は考えていた。そして、この研究は樂園の永遠のテーマでもありそうだ。

「甲斐谷なに余所見している」

はげ頭の教師が注意した。俊ははっと我に返って、前に向き直り「すみません」

と謝った。運が悪かったな、と小さくため息をついた。余所見をしていなくても、聞いていなかった者は何人かいるはずだ。その中で、不運にも俊が選ばれてしまった。

「続きから読んでみる」

俊は教科書をぱらぱらと捲った。どこから読めばいいのか全くわからなかった。

「百二十ページの五行目から」

隣から押し殺した声が聞こえた。俊は隣の席にちらっと目を向けた。桜庭麻由は眠気を感じられない顔で教科書に目を落としていた。彼女は真面目に授業を聞いている、少数派の生徒らしい。

俊はそのページの五行目から読み始めた。国語の教師は驚いていた。俊が余所見していたものだから、どうせわからないとも思っていたに違いない。

「サンキュー」

読み終えてから、俊は声を潜めて言った。桜庭は俊のほうに顔を向けると、なにも言わずに微笑んだ。彼女の微笑みに、思わず俊はどきりとした。少しの間、桜庭の横顔をぼんやりと見つめていた。

彼女は黒髪のショートヘアで、ぱっちりとした大きな目をして

いる。美しい美貌と大人びた雰囲気を持ち合わせている彼女は、ク
ラスの男子からも人気がある。成績優秀で運動神経がよく、非の打
ち所がない。まさに才色兼備という言葉がぴったりだ。すらっとし
た長い足に加え、モデルのように身長が高いのは、バレー部員だか
らだろう。

俊の視線に気づいたのか、桜庭は俊のほうに顔を向けた。思わず
俊は目を逸らした。

「どうかした？」

「うつん、なんでもない」

俊は教科書に視線を変えてから言った。

授業が終わると、俊は国語の教師に呼び出された。授業はちゃん
と真面目に受けると注意された。それだけを言うと、国語の教師は
教科書とプリントを持って教室を出ていった。

「おい、俊」

後ろのほうから声がした。俊は声の主を探すために、首を捻った。
一番後ろの席で、織田春樹がにやにやとした顔つきで手招きしてい
た。

「なに？」

俊は春樹の前の席に座った。

「前々から思っていたんだけどさ……」

と言って、彼は一旦口を閉じた。が、顔つきは変わらない。

「前々からなんだよ」

もったいぶった春樹の態度に、俊は先を促した。

「俊てさ、桜庭のこと好きなんじゃない？」

「えっ！」

目が点になる俊。凶星だった。

「やっぱり……」

俊の顔色を読み取って、春樹は納得した。

「なんで、わかった？」

「自分では意識してないかもしれないけど、俊ってわかりやすいん

だよな。顔に出ているっていうか……さっきの授業中も桜庭のこと見てただろ」

かっ顔が熱くなる。彼女のことを気になるとは誰にも言った覚えがないし、それは俊の胸だけに秘めてきたことだった。

それに今まで意識したこともなかった。他人に言われ、顔に表情が出ていたということに初めて気づいた。人間は些細なことを見逃さない鋭い生物らしい。

「桜庭のこと好きなら、早く告白したほうがいいぞ」
「どうして？」

春樹は俊のほうに少し身体を乗り出した。

「桜庭って人気あるだろ。だから、早く告らないと他の男に取られちゃうってこと」

「ああ、そういうこと。誰か桜庭を狙っているやついるの？」

春樹は首を捻り唸った。

「俺が知っている限りでは、俊を除いて二人だな。一人はこのクラスの佐郷。で、もう一人は隣のクラスの千葉だな」

「そっか」

「告白するなら手伝ってやろうか」

俊は首を振り、しなときっぱり答えた。

「どうして？」

「俺は、このまま片想いでいいんだ」

俊は窓の外に目を向けた。

俊は複雑な事情を抱えていた。人間の恋愛事情に関わってはいけないこと。それは、片想いさえも禁じ手なことなのだろうが、仕方の無いことだと割り切ることにした。それでも、天使の掟を破っているという罪悪感があった。片想いのまま、後一年と少しを乗り切れればいい。

「ふうん。まあ、俊の好きにすればいいさ」

次の授業の開始を告げるチャイムが鳴った。途端に教室は慌しくなった。俊は席を立った。

「想いを伝えないと後悔することになるかもしれないぞ」

俊はわかっている、と言い残し自分の席に戻った。

俊は下界にやって来るまでのことを思い出した。下界に来てもう一年近くが経つ。彼が下界に降り立ったきつかけとなったのは、樂園の長ミカエルから命を受けたからだ。彼の命は絶対的なもので、願い下げすることはできない。

地上より遙か空の彼方に存在する、天使たちの世界。下界では、天国と呼ばれている世界だ。天の国　樂園^{エデン}　では、さらに十の天国が存在する。天使たちは樂園で最も崇拜されている、四大天使の一人であるミカエルによって、その国々に配属されている。彼は樂園を束ねる天使たちの長でもある。そして樂園の天使たちは、九つある階級のどこか一つに必ず属している。

能天使のファニエルは、第六天国で下界についての研究を行っていた。彼は「日本」という国の研究と、人間の心理について任されていた。

第六天国の研究所は下界について研究を行っている国だ。それゆえに、この国にいる天使たちは、どの国の天使たちよりも下界の事情に精通している。ファニエルのほかに数人の優秀な天使たちがこの研究施設にいた。

そんなファニエルの研究所に一羽の伝書鳩がやって来た。樂園ではミカエルの言伝を、全て伝書鳩で伝えることになっている。鳩の頭の上には、金色に輝く輪が浮かんでいる。

ファニエルは伝書鳩から伝書を外すとそれを読んだ。

「ファニエルへ

至急、宮殿まで来なさい。君に、大事な言伝がある。本来ならば、伝書に記すべきなのだが、大変重要なことだ。だから、私の口から直接話すでしょう。」

ミカエルより』

ファニエルは伝書を握り締めると研究所を出た。透き通る青空に顔を向け、ファニエルは勢いよく飛び立った。そして宮殿に向かった。

宮殿は第四天国にあった。その宮殿にはミカエルたち四大天使が住んでいる。彼らは、常日頃この第四天国から天界を見守っている。天界で問題が発生すれば位の低い天使たちを遣いに出すのだ。

「ミカエル様が王の間でお待ちでございます」

宮殿の門をくぐり抜けようとしたとき、門番の天使が言った。ファニエルはわかっていて、顔を向けずに言い門を抜けた。宮殿の警備は、あの日以、来樂園の中でも最も厚いものとなった。

王の間は宮殿の中央部にあった。ここに入ることができるのは、ミカエルから呼び出されるときくらいだ。ファニエルは過去に一度だけ入ったことがあった。

大変重要は話ということを出し、ファニエルは少し緊張していた。ミカエルから呼ばれるのは、第六天国で下界の研究に携われ、と命を受けたとき以来だ。それもずいぶん前のことだ。ファニエルは大きく息を吸い込み吐き出すと、王の間の扉を開いた。

ミカエルは真っ白な壁に囲まれた部屋の中央で、黄金の椅子にどっしりと構え座っていた。さすがに樂園の頂点に立つだけのことがあり、ただ座っているだけで威厳を感じる。まるで他の天使たちと段違いだ。その威厳に、ファニエルは圧倒されそうになった。

ファニエルはミカエルのところまで歩み寄って行くと、跪き頭を下げた。

「ミカエル様、どういったご用件でしょう」
「顔を上げなさい」

ミカエルに言われ、ファニエルは顔を上げた。まだ若い大天使のミカエルは穏やかな顔をしていた。彼の翼は眩しいほどの純白だった。樂園で最も綺麗な翼を持つ天使と言われている。

彼を含め、四大天使と呼ばれる大天使たちは、とりわけ熾天使や智天使など高位階級を支配するほどの力を備えているのだ。

「早速だが、君に今回の命を授けよう」

「はい」

ファニエルは身を引き締めた。

「君には、下界に降り立って向こうで過ごして来てもらいたい。期間は約二年半だ。引き受けてくれるか？」

「はい。ですが、その命をどうして私に……」

それほど重要でもない命に、ファニエルは少し気落ちした。本来、そういった命は位の低い天使たちが受けるものだ。能天使がそのような命を授かったということを聞いたことがなかった。

「君だからこそ、お願いしたいんだ」

「私だからこそ……ですか？」

「君は今、日本という国の研究をしているだろう」

「はい、と言ってファニエルは頷いた。

「その日本に行ってもらいたいんだ。そして人の心理、行動、下界の知識などを吸収してきなさい。研究室に籠もっているだけではわからなかったことも、きつとわかってくるはずだ」

「一度下界に行つて、自分の目で確かめてこいというわけですか。だから、私に命を授けたのですか？」

「そうだ。研究者として、下界に直に勉強しに行ってもらいたい」
「わかりました。では、早速行つて参ります」

ファニエルは立ち上がると、ミカエルに背を向けた。歩き出そうとした瞬間、

「ちょっと待ちなさい」

とミカエルに呼び止められた。ファニエルはミカエルのほうに向き直った。

「忠告がある。わかっていると思うが、人間に恋するんじゃないぞ。これは天使の掟だ。掟を破ったらどうなるかわかるな」

「ええ、それは天使の裏切り行為。ここに戻ってくる資格はないと

いうことですね」

ミカエルは頷いた。その天使の掟は百も承知。

「それと、これを渡しておこう」

ミカエルは一枚の紙片を取り出すと、ファニエルに渡した。

「これはなんですか？」

ファニエルは紙片に目を落としながら、訊いた。そこには「甲斐谷俊」と書かれていた。

「日本で名刺と呼ばれているものだ。いわゆる、身分証明書だ。下界ではその名前を使いなさい。それと……」

ミカエルは急に真剣な顔に変わった。

「下界にいるときは、天使の力を控えなさい」

「はい」

ファニエルは彼の顔をしっかりと見据え言った。

「日本には第一天国から降り立つといいだろう。門番のサニエルには、伝書鳩を送ってあるから、君を見れば通してくれるはずだ。最後に、下界では甲斐谷時子という女性の家に居候しなさい。彼女の許へ手紙を送っておいた」

「人間に手紙を送ったのですか？」

ファニエルは驚いた顔で訊いた。下界に言伝を送ったというのも過去に例を見ないことだった。

「問題はないだろう。彼女はもともと天使だったんだからな」

ミカエルは微笑を浮かべた。ファニエルにはどこか少し悲しさの宿った表情とも思えた。

王の間を出たファニエルは、男の天使によって、偽の間へ案内された。

偽の間には、カエル、ライオン、ネコ、イヌ、人間と下界のありとあらゆる生物のモデルがところ狭しと置いてあった。その中には下界を研究しているファニエルが初めて見るものもいくつかあった。天使たちが下界に降りるときは、ここでその生物に成りきって降り立つのだ。今回ファニエルは人間の姿を模すことになる。

「ここで、少しお待ちください」

ファニエルを入り口に残し、男の天使は奥のほうに消えていった。彼は間もなくして、人間のモデルを持ってやって来た。短い髪の毛で、小柄な若者だった。外見では際立って目立つようなところはない、ごく一般的な人間だ。また紺の制服を身につけていて、かばんを持っている。下界に降り立って、学校に行かなければならないようだ。

「こちらのほうに身体を移してください。これが、日本人のモデルです」

ファニエルは、モデルの胸に手を当てると目を瞑り意識を集中させた。すると、なにかに吸収されるような感覚に陥った。

目を開けると、慣れない感覚だった。意識がモデルのほうに移ったようだ。ファニエルは身体を少し動かしてみた。首を回してみる。骨がぼきぼきと鳴った。胸に手を当ててみると、一定の間隔で心臓の鼓動が伝わってくる。

「これが人間か。動かしにくい身体だな」

「ミカエル様によると、高校生という設定らしいです。一番人間の心が不安定な時期らしいですよ」

「なるほど。人間の心理を学ぶにはもってこいだな」

その後、偽の間を出たファニエルは第一天国へと向かった。

第一天国は下界に最も近い天国だ。下界で死んだ人間の魂は、ここで浄化される。また神によって創られた最初の間も、この第一天国で創られたらしい。

第一天国は極めて下界に近い風景をしている、天界では特別な国でもある。そして、最も天使の数が多い国だ。しかし、その天使たちは皆位が低く、中には翼をも持たない天使もいる。下界に派遣されるという命は、たいてい彼らが受けるのだが、今回は特別のようだ。

上位階級や中位階級の天使たちは、第一天国の管理を任されるために、配属されているくらいである。

東の門付近には大きな協会が見える。そこで魂の浄化と共に、天使によって人間の審判が下される。審判方法は至ってシンプルである。天使が人間の魂に向かって、「審判の十字架」をかざし、十字架が赤い光を発せば、悪行を行った人間と審判が下され、また眩い白い光を発せば、善人と審判が下される。

悪行を行った人間は地獄に落とされ、善人、または特に悪意ある行動をせずに死んだ者は、天使となるかもう一度人間として生まれ変わるか審判が下される。といっても、天使となれる人間は極僅かだ。たいていは、人間となって新たな命を宿す。だから、人間の命は輪廻転生と言われているのだろう。

ファニエルは東の門に向かった。協会を横切るとき、位の低い天使たちが物珍しそうにファニエルを眺めていた。第一天国に中位階級の天使が来ることは、彼らにとって珍しいことである。以前にも、こういった注目を集める経験をしたことを思い出した。

「よう、ファニエル。似合ってるじゃないか」

ファニエルの姿を見て、門番のサニエルは大口を開けて笑った。

うるさい笑い声が第一天国に響いた。彼とファニエルは楽園で数少ない親友と呼べる仲だった。彼は、もともとは第六天国の守護門番を務めていた。そのとき、ファニエルとサニエルは出会った。だがしばらくして、ミカエルの命を受け第一天国の守護門番をすることになったのだ。大剣を武器にする、楽園の戦士である。

「うるさいな。俺も好きで下界に行くわけじゃないんだよ」

ファニエルは天を仰ぐように顔を上げた。サニエルはかなり背の高い守護天使だ。

「それにこういった役は、俺よりもあいつのほうが適していると思うんだけどな」

「あいつというと、ベリアルのことか」

「ああ」

サニエルは白い髭に手を当て、まじまじとファニエルを見下ろし、にやりと笑みを浮かべた。

「やっぱり、お似合いだな。天使より人間のほうが、かつこいいんじゃないか」

サニエルは再び大口を開け笑った。腹が立ったファニエルは、サニエルの足の指を蹴った。しかし彼は何事もなかったかのように笑い続けている。

「そのまま人間になっちまえばどうだ」

サニエルはからかうように言った。

「やだね」

ファニエルは、ふんと鼻を鳴らした。

「さつさと門を開けてくれよ」

「おう、悪い。今開くぜ」

サニエルは両手を門に当てると、踏ん張っておもいきり門を押した。門は鈍く軋むような音を響かせゆっくり開いた。

「それじゃ、行ってくるわ。しばしのお別れだな」

「気をつけてな」

ファニエルは光り輝く門へと歩き出した。

俊が桜庭と出合ったのは、下界に降り立ってすぐのことだった。このときは、まさか、自分が錠に背くようなことになるとは思っても見なかった。結論から言ってしまうば、俊の一目ぼれだった。

楽園を出て彼が降り立ったのは、小さな公園だった。幸い人に見られることはなかった。俊はベンチに座り考え込んだ。どうやって時子の家に辿り着けばいいのかが問題だった。

時子の家がどこにあるのか、ミカエルから聞いていなかった。ただ、下界では甲斐谷登時子という女性の家に居候させてもらえ、と命じられただけだ。

慣れない制服に身を包んでいたため、気持ち悪かった。ブレザーを脱いだとき、ポケットになにかが入っていることに気づいた。それを取り出してみる。四つ折りにされた、一枚の紙片だった。それを開いてみると、「
県市町5218 甲斐谷時子」と書かれていた。

公園を出ると、近くの電柱を見た。そこに記されていた住所は紙片とは違うところだった。きよろきよろと辺りを見回してみる。誰かに聞いてみようかと思ったのだが、誰も人は見当たらなかった。いちいちどこか家を訪ねてまで聞こうとは思わない。

この町は、どうやら都会と言えるほどの大きさではないようだ。むしろ、田舎に近い殺風景な町だ。近くには緑に染まった山が連なっているし、大きな道も少ない。また陽を遮るような大きなビルやマンションもあまり見当たらず、木造建築の建物が多い。それに、車通りもさほど多くない。俊は再度紙片に目を落とした。

「ねえ…… なにか、困ったこともあるの？」

突然声をかけられ、俊は驚いた。顔を上げると、目の前に紺の制服を着た女が立っていた。背が高く、清楚な感じの女だった。背中にまでかかる長い黒髪が、清楚な感じをより一層際立たせている。

「えっと、この住所のところに行きたいんだけど」

俊は女に紙片を渡した。

「ここ、甲斐谷さんのお家じゃない」

「知ってるの？」

「うん、うちの近くだから、案内してあげるよ」

「ありがとう。助かるよ」

女は歩き出した。俊は少し遅れて女の後をついて行く。

「それにしても変わった人ね。あなた、あたしと同じ学校の人でしょ。それなのに、学校の近くの住所がわからないなんて。もしかして転校生？」

「ああ、うん」

俊は誤魔化した。本当のことは決して言えない。

よく見れば、女と俊の制服は同じ色をして似ている。胸のポケットに刺繍されたマークは同じだった。

「そっか。転校生なら仕方ないね。あの、甲斐谷さんのお家にはなんの用なの？」

女は詮索するのが好きなようだと俊は思った。好奇心旺盛とでも言えるのだろうか。

「どうしてそんなこと聞くの？」

「あつ……ごめん。答えたくなかったらいいよ。別に答える必要ないものね」

女は少し慌てた様子で、目を伏せた。

「居候させてもらうんだ。そこから高校に通うつもりだから」

「そうなんだ。それじゃあなたは、甲斐谷さんの親戚の人？」

「俺の父の母に当たる人。転校することになって、おばあちゃんの家から通うことにしたんだ」

俊は適当なうそをついた。

「それなのに、あなたはおばあちゃんの家を知らなかったの？」

驚いたような顔で女は言った。

「小さい頃に一度来たただけだから、あまり覚えていないんだ」

しばらく歩いたところで、女は木造建築の古びた建物の前で足を止めた。色褪せた木造が、建築されてだいぶと経っているところとを物語っている。木造の表札に「甲斐谷」と楷書の字体で書かれていた。それも色が薄くなっていた。

家を囲むように作られているブロック塀の所々にも、小さなひびが見受けられた。大地震が発生したら、まず間違いなく倒壊するだろう。また玄関前にはいくつもの植木があった。キンモクセイ、キク、オシロイバナ、オンシジュームと秋の花が色とりどりに咲いている。全て俊の知っている花だった。それもまた樂園で身につけた知識だ。

「ここが甲斐谷さんのお家よ」

「ありがとう」

俊はチャイムを鳴らそうとして、寸前で指を止めた。女のほうに振り返って、口を開いた。

「俺からも一つ聞いていいかな」

「なに？」

「君は、どうしてうちのおばあちゃんの家を知ってたんだ？」

「甲斐谷さんは、うちのお店の常連さんだから。うち、花屋さんやってるんだ」

女は指で髪を耳に掻き上げると、目を細め微笑んだ。一瞬、女の仕草にどきりとした。

「今更だけど君の名前は？」

「サクラバマユ。あなたは？」

「甲斐谷俊。よろしく」

俊は女に向かって微笑み返した。

女と別れた後、俊は家のチャイムを鳴らした。家の中で動きを感じ、俊はもう一度チャイムを鳴らそうとした指を止めた。数秒後、鍵の外れる音が聞こえ、玄関の扉が開けられた。

中から老婆が顔を覗かせた。白髪頭の彼女の顔には、いくつもの皺が寄っていた。年は七十代後半くらいのように見える。

「どちら様ですか？」

老婆は怪訝な顔を俊に向け尋ねた。かすかに警戒の色が浮かんでいた。

「あの、あなたが甲斐谷時子さんですか」

「ええ、そうですけど……」

なにかを思い出したのか、ふと老婆の顔色が変わった。警戒の色はすっかり消えていた。

「もしかして、あんたは樂園から来た天使かな？」

「そうです」

時子は一つ頷くと、玄関の扉を大きく開いた。

「お入り。事情は聞いているから」

俊は時子に促されるまま家の中に入った。

家の中も、外見と同じように古びていた。相変わらず木造は色褪せている。壁には薄っすらと黄ばんだ染みのようなものが所々にある。廊下を歩くとき、一步一步足を踏み出すたび、床が鈍く軋む音が響く。

廊下を挟んで四つの部屋があった。左側に和室と応接室、右側に寝室と空き部屋が一つという具合だ。空き部屋が俊の部屋になるらしい。部屋の仕切りは全て襖だった。

空き部屋は六畳ほどの部屋だった。綺麗に片付いた部屋には小さな机と、その隣にテレビが置いてあった。壁には折り畳み式のベッドがもたせ掛けられていて、その横には小さな茶箆筥が置いてあった。生活に最低限必要なものは揃っている。

「ここは、あなたの部屋にあてたものだから、好きなように使いなさい」

机の引き出しや、箆筥の引き出しを見たが、なにも入っていないかった。衣類や文具はこれから揃えなければならぬようだ。

「どんな天使が来るかわからなかったから、衣服はまだ用意していないんだよ」

時子は少し申し訳なさそうな顔で言った。俊は時子のほうに顔を

向け首を振った。

「いえ、居候させていただきだけでも厚かましいのに、部屋を用意してくださってありがとうございます」

俊は深く頭を下げた。

「いいのよ。これで、私の生活にもちよつと張りが出てくるわ」

時子は顔をくしゃくしゃにして笑った。

時子と少し話をした後、俊は時子の自転車を借り、家を出た。衣服を揃えるための買い物をするためだ。本来ならば空を飛んで移動したいところだが、ミカエルの命によって天使の力を使うことを禁じられている。それで仕方なく彼女の自転車を借りることにした。

店で数着の衣類を買い、俊は早速着替えてみた。ジーンズを穿き、ティーシャツという出で立ちだ。やはり制服同様に、慣れないものだった。ジーンズは硬く動き辛い。その一方で新鮮な感じもあった。楽園では皆が、白い衣を身に纏っていた。それが天使の衣装だ。

一部の天使や、守護天使たちは鎧のようなものを纏っていたが、それは彼らが特別な天使たちだからだ。天使の中には、下界の衣服に憧れを抱いているものも何人かいた。俊は楽園に戻る際に、下界の衣類を何着か持って帰ろうと考えた。研究材料にも天使たちへのプレゼントにもなりそうだ。

帰り道、周辺の道を覚えるために少し違う道を通った。その途中、「桜庭植物店」という看板の文字が目に入り、思わず自転車を止めた。

店の前では、先ほどの女が花に水をやっていた。女にかけているエプロンには店の名前のロゴが入っている。女は花を並べ終えると、額の汗を拭った。その直後、俊と目が合い女はにっこりと表情を緩ませた。

その瞬間、俊の胸はまたどきりと鳴った。気持ちが勝手に昂ぶっている。抑えようのない気持ちだが、胸の底から込み上げてくる。

「お店の手伝い？」

俊は店の花に目を向けながら、声をかけた。コスモス、薔薇、マ

リーゴールドなど、秋の花が咲き誇っていた。

「そう。部活がない日は、家の手伝いをやっているの。あたしもお花好きだから。なかなか似合ってるね」

そう言って、女は俊をまじまじと見た。思わず俊は女から目を逸らした。なぜか女を直視することをはばかれた。

「あ、そうだ。ちよつと待ってて」

女は店の奥へと消えていった。それから少しして、植木を持って戻ってきた。淡いピンク色の、星型の五枚の花弁をつけた花が咲いていた。

「これ、あなたにあげるよ。転校生で同じ学校、きつとなにかの縁だろうし。綺麗なお花でしょ」

彼女は植木を差し出し、俊はそれを受け取った。

「クロウエアか。いや、サザンクロスと言ったほうが、日本では馴染があるのかな」

「よく知ってるね」

女は驚いた顔をした。俊が花のことに精通していると思わなかったのだろう。無論、俊は花に興味があるわけではない。ただ、研究で身につけただけのことだ。

「あなたもお花好きなの？」

俊は首を振った。

「ちよつとした知識として知ってるだけさ」

「サザンクロスの花言葉は」

「願いをかなえて……だろ」

女はうんと頷いた。

「願いをかなえて……か。俺は恋を成就させるようなキューピットとは違うからな」

俊はかみ締めるようにぽつりと呟いた。女は聞き取れなかったらしく、なにとちよつと首を傾げて聞いてきた。俊はなんでもないと笑って誤魔化した。

下界の願い事は、恋愛事情に関しての願いがよく見受けられる。

人の世の恋愛を成就させる役目は、天使でも、キューピットと呼ばれる子供の姿をした天使の役目だ。残念ながら、俊たちのような天使にそういった力はない。

家に帰ると、早速窓際に植木を置いた。明るいものが一つ部屋に加わった。質素な部屋には、なんだか似つかわしくないように思えた。

俊は人差し指で、サザンクロスの花弁に優しく触れた。そして、花屋でのことを思い出した。頭の中に女の顔が蘇ってくる。それと同時に、胸の鼓動が速くなり気持ちが昂ぶって来た。

俊は頭を振った。早く拭い去らなければならない想いだ。天使の掟として、人間に恋してはいけない。それが天使の運命。一目ぼれや片想いとは言え、それは変わらないだろう。早くも掟を破ってしまった。この想いを捨て去らない限り、楽園へ帰ることはできない。

だが俊はその想いを簡単に捨てることはできなかった。女の笑顔を思い出す度、気持ちは昂ぶって来る。なんともどかしい気持ちだ。そして気づけば片想いのまま、一年近くが過ぎていた。

「それじゃ、後期の役員を決めようか。委員長の佐郷と藤崎は前に来てくれ」

俊のクラスの担任教師である高根隆三が言った。後期が始まって、二週間ほどが経った頃だった。クラス役員は半期で変わることになっている。夏休みを跨いで半期が終わったため、後期の役員を決めようというのだ。

佐郷優と藤崎千春は教壇に立った。その後、二人は黒板に役員名を書き並べていった。高根は彼らが書き終えるのを、髭の生えた顎に手を当てながら待っていた。彼らが全て書き終えると、高根は再び口を開いた。

「よし、それじゃ決めていこうか。どういう風に決めていく？」

高根はクラスをざっと一瞥すると訊いた。

彼は、まず生徒たちの意見を優先する教師だ。決め事があるときは、いつも生徒たちにどういった風に決めていくのかと提案する。そこが他の教師たちと違う点でもあった。型に嵌った考えを嫌う人なのだ。決して若いとは言えないが、高根は若者の流行に敏感で、生徒たちともよくファッションやゲームについての話をしている。話の合う先生としてなかなか生徒たちの支持率も高い。教師を対象にした人気投票を行えば、まず間違いなく上位に食い込むだろう。

「くじ引きなんてどうですか？ 時間もかからないし」

「立候補形式でいいんじゃないですか？」

ざわついた教室からは様々な意見が出た。高根は委員長の二人を見ながら、

「それじゃ、委員長に決めてもらおうか。現委員長の最後の審判だな」

と、冗談っぽく言うが高根は笑った。時折こんな風に冗談を言って、クラスを笑いにもって行こうとする一面もある。

「立候補形式で行きましょう。で、余ったところと人気のあるところは、くじ引きかじゃんけんでいいんじゃないでしょうか？」

佐郷が答えた。高根はどうだと言って、クラスの反応を窺った。誰も反論する者はいなかった。満場一致で、佐郷の案が採用されることになった。

「全員が何かしら役員に入らなければならないからな。楽そうな役員に立候補しておくで得だぞ」

確かにその通りだ、と俊は思った。

高根に拍車をかけられてか、図書委員、美化委員、書記は特に人気が高かった。これらの役員は全て楽なのだ。楽といっても全く仕事がないわけではない。が、役員に席を置くだけで減多に仕事と言えるようなことはない。結局、それらの役員は立候補者が多く引きで決められることになった。

俊はどの役員にしようか、未だに決めかねていた。正直なところ、どの役員にも入りたくないのだが、高根の言ったようにどこかには必ず入らなければならない。

半分ほど決まったところで、順調に進んでいた役員決めが滞ってきた。進んで手を上げる者が減ってきたのだ。残りの役員は、楽と言えるものではなく、どちらかというと面倒なほうだ。まだ決まっていない者は、少しでも楽ができそうな役員はどれなのか、と真剣な顔で考えているようだ。

「あたし、文化祭実行委員やります」

手を上げて言ったのは、桜庭だった。それを見て、まだ決まっていない男子生徒の何人かが、こぞって文化祭実行委員に立候補した。立候補者の狙いは彼女なのだろう。俊も例外ではなかった。それらの男子生徒に混ざって、すかさず手を上げていた。

文化祭実行委員は後期役員の中で、特に大変な役員だと言われている。文化祭間近には、放課後の時間を潰してまで準備に追われる。更にクラスの催し物のときも、率先していかなければならない。最後まで残るはずの役員が、桜庭によって潰されることになった。

案の定、くじ引きで決められることとなった。俊が選ばれる確率は五分の一だ。藤崎が五つの棒を持って、それを一人ずつ引いていた。赤い丸の印がついた棒を引いた者が当選者となる。

じゃんけんで棒を引く順番を決め、俊は二番目に棒を引くことになった。棒を引こうとしたとき、一瞬、藤崎が眉間に皺を寄せた。俊はその棒を引くことを止め、隣の棒を引こうとした。すると今度は、藤崎はウインクを投げかけてきた。俊は迷わずそれを引いた。瞬間、思わず笑みがこぼれた。棒の下の方に小さな赤い丸があったのだ。俊は運よく、文化祭実行委員に選ばれた。選ばれなかった者は、心底残念そうな顔をしている。

「また一緒だね。よろしく」

俊が席に戻ると、桜庭が言った。またというのは、前期も桜庭と同じ役員だったからだ。そのときは、天使の掟に背いてしまい天使の力を使ってしまった。だが、俊はそれでよかったのだと今は思っていた。後悔はしていなかった。

「ああ、よろしく」

役員を決め数日が経った頃、文化祭実行委員の二人は、放課後に職員室へ来てくれ、と高根に呼び出された。

「おっ、来たか」

俊が職員室の扉を開けると、高根が言った。桜庭は既に来ていた。担任教師の前に立ち、手に持った紙に目を落としている。

「実は、文化祭の催し物について、二人で案を出しておいてもらいたいんだ」

俊は桜庭の持っている紙を覗き込んだ。桜庭は俊が見やすいように、紙を少し俊のほうにずらした。

クラスでの催し物を決める紙には、第一希望から第三希望まで記入欄があった。第三希望まであるのは、生徒会で適切か否かを決めるためだ。無茶苦茶な催し物や、他のクラスと重複してしまうよう

な催し物があれば、生徒会によって棄却されてしまうことがある。

「俺たち二人で決めろということですか？」

俊は確認するように言った。高根は首を振って、口を開いた。

「いや、二人に案を出しておいてもらって、クラスで多数決なりを採って決めようと思っている。そうすれば、授業の時間や休み時間を割かなくても済むだろ」

「でも、みんなで案を出さないと意味がないんじゃないですか？」

せつかくのクラスでの催し物だし」

桜庭が反論する。

「もちろん、みんなにも聞く。ゼロからじゃなく、できるだけ案を出しておいてから進めたほうが、無駄も少ないだろ」

「確かにそうですけど。面倒だな……」

俊はため息混じりに呟いた。

「進んで立候補した役員だろ。これも文化祭実行委員の仕事だ」

そう言われると、俊は弱るしかなかった。なにを言い返しても、結局、文化祭実行委員を選んだのは俊の意志なのだ。

「まさかお前も、桜庭お目当てにこの役員を選んだわけじゃないんだろ」

意地悪に笑みを浮かべた高根はずばりと言い当ててくる。

「そつなの？」

桜庭は驚いたように言った。

「ち、違いますよ」

俊は否定したが、高根の顔は笑っていた。きっと本心は見抜かれているのだろう。一方で桜庭は少し気落ちしたような表情に変わっていた。

「まあ、面倒かもしれないが、よろしく頼むよ」

俊は、はいとだるそうな声で返事を返した。一方で桜庭は俊と違って、目を輝かせていた。文化祭実行委員という、えらく大変な役員を楽しんでいるように思えた。さすがに立候補しただけのことはある。

「まあ、まだまだ時間はあるから、ゆっくり考えてくれ。二週間後くらいに、クラスで決定できるようにしたいから、それまでに考えておいてもらいたい」

二人は頷いた。そして職員室を後にした。

「どうしよつか？ いつ決める？」

職員室を出てすぐに桜庭が訊いた。

「俺はいつでもいいけど……桜庭は？」

「今日は部活があるから、明日の放課後はどう？ 早いうちに決めちゃおうよ」

「わかった」

「じゃ、また明日ね」

桜庭は俊に背を向けると、廊下を走り去っていった。部活動に入っていない俊は、校門を抜け居候の家に向かって歩き出した。遠くに見える山々は、夕焼けで赤く染まっていた。

高根の前では面倒だと言ったが、実際はそう思っていなかった。桜庭と二人の時間を過ごせるのなら、多少の面倒臭いことなど構わないと思っていた。

想いを伝えることは許されないが、一緒にいることなら許される。後一年とちよつとの時間を、桜庭と少しでも多く時間を共有したいと俊は思っている。それが、想いを伝えることのできない運命にある、天使の精一杯の行いだ。

家に着くと、合鍵で錠を外した。時子は一人暮らしで、家にいるときも常に鍵をかけている。合鍵は俊がこの家に来たときに、既に用意されていた。時子は用意周到な人なのだと、感心したことを覚えている。

居間のほうからテレビの音量が漏れていた。時子は耳が悪いらしく、テレビなどを見るときは常に音量が大きい。だが俊がいるときは気を遣ってくれてか、音量を下げてくれる。俊が居間に入ってきて来

たのを確認すると、いつものように時子はテレビの音量を下げた。

「あんた宛に手紙が来てたわよ」

時子はテレビに目を向けたまま言った。

テレビではサスペンスをやっていた。テロップが流れ、ちょうどコマーシャルに入ったところだった。天使としての面影はすっかりなく、人間として馴染んでいるなと俊は思った。

俊は時子のことを詳しく知らない。この家に来て、時子が楽園でどういった天使だったのか、ということ聞いたことがなかった。家に来てすぐのときは、時子は本当に天使だったのだろうかと思っていたが、生活を共にしていくうちにその疑問は消えていった。時折、時子は楽園でのことを俊に話してくれたのだった。だから、俊のほからはあまり詮索しないようにしている。

「誰から？」

「ミカエル様から」

時子は湯飲みを持ち、お茶を啜った。

「手紙は？」

「あんたの部屋の机に置いてあるよ」

時子は俊のほうに顔を向けると、しわくちやの顔で意味ありげに笑った。どういった意味が含まれた笑みなのか、俊にはわからなかった。

「それにしても、あんたも大変ね」

「どういう意味ですか？」

俊は首を傾げた。

「手紙を見ればわかるさ」

俊は自分の部屋の部屋に通じる襖を開けた。机に目をやると、一枚の封筒が置いてあった。封筒は一度開けられた形跡があった。どうやら時子が既に読んだらしい。

「ファニエルへ」

私はファニエルの全てを楽園から見ている。君は天使の力を下界

で使ったようだ。天使の力は、人間の運命をも変えてしまう恐れがある。我々天使は人間の運命に干渉してはいけないのだ。下界で天使の力を使うことはルールに反することでもある。

それに、人間にも恋をしているようだ。考え直しなさい。樂園から一年間見てきたが、君は恋心を捨てきれずにいるだろう。天使の掟というものを忘れてはならん。今の君には、樂園に戻る資格はない。その気持ちを捨て去るよう努力しなさい。これは、私からの最初の忠告です。再度言うが、掟を破ることは厳禁だ。

ミカエルより『

手紙を読み終えると、俊はため息を漏らした。ミカエルには全てお見通しのようだ。やはり、天使には人を想うことさえ許されないらしい。人間と天使。それは、互いに干渉してはならない、決して交わってはならない領域なのだ。故に、天使は掟に背き続けていたら、いつか墮天させられてしまい、人間か悪魔となる運命なのだ。「天使にもいろいろ事情があるんだね」

俊が居間に戻ると、時子がしんみりとした口調で言った。

「まあ、そうですね」

俊は苦笑した。

「悩み事があるなら、いつでも私が相談に乗ってあげるよ」

時子は俊のほうに顔を向けた。目は真剣だった。

「ええ、そのときはお願いします」

「それでも、大先輩の天使なんだから」

時子はにっと笑った。そして付け加えて言った。

「今は人間だけだね」

その教室は二階の一番奥にあった。学習室という、休み時間や放課後に生徒たちが自由に使える教室だ。本来、この教室は生徒たちの自由学習の空間として設けられているのだが、普段この教室を、勉強を目的として利用する生徒はほとんどいない。昼休みに昼食の場所として利用される程度か、世間話に花を咲かせるためのたまり場となるくらいだ。勉強を目的として利用されるのは、中間テストや学期末テスト間近のときに、休み時間や放課後の時間を使って勉強をしたりするときくらいである。

昼休みに桜庭と相談して、どの場所が最適かと考えた末、学習室が思い当たった。この場所だと、他の者に邪魔されることもないだろう。二人だけの時間を作るのにも最適な場所だ。

案の定、俊が教室に入ったとき、誰もいなかった。俊は窓側の一番後ろの席に座った。前の授業で化学を行っていたのか、黒板には熱化学方程式が書かれていた。一見、難しそうに見えるが、俊にとっては取るに足らないような問題だ。

かばんを開け、ノートと筆記用具を取り出した。そのノートに、出た案を書き留めていこうというわけだ。俊はくるくるとペンを回し、ぼうつと窓の外に目を向けた。

しばらくすると、廊下に足音が響く音が聞こえてきた。足音は徐々に大きく近づいてきた。そして学習室の扉が開けられた。

「ごめん！ 遅れちゃって」

桜庭は顔の前で手を合わせ詫びた。

「別にいいよ」

「今日、部活の集まりがあるのをすっかり忘れてて……」

桜庭は俊の前の席に着いた。桜庭は椅子ごと後ろに向き、二人は向かい合う形となった。

「部活、大変なの？」

「もう少しで大会だから、みんな一生懸命だよ」

「そっか。今日も部活あるんだよね」

桜庭は頷いた。

「じゃ、さつさと決めちゃお」

「いいよ。今日は遅れて行くって言うてあるから」

桜庭は文化祭実行委員の仕事を疎かにする気はないようだ。部活が大変だというのに桜庭は文化祭実行委員の仕事もちゃんとこなそうとする。あのときの目を思い出すと、それもそうかと俊は納得した。

「文化祭での催し物なにかある？」

桜庭が訊いた。

「そうだな……」

俊は片方の手でペンを回しながら、もう片方の手で頼杖をつきながら考え込んだ。

「焼きそばとか、クレープとか、たこ焼きなどの飲食系か、お化け屋敷とかのアトラクション系でいくつかのどっちかだよな」

俊は呟くように言った。そしてそれらの案を一応ノートに書き留めておくことにした。が、あまりにも普通すぎて、これらの催し物はないだろうなとも思った。

「そうだね。でも、もっと奇抜な面白いことしてみたくない」

「面白いことって、どんなこと？」

俊は小首を傾げて見せた。

「モノマネ大会とか、一発芸大会なんてどうかな？ で、優勝した人には商品ありでさ」

「それ面白いかも」

「でしょ」

桜庭は少し誇らしげな顔だった。俊はノートに書き留めた。

「飲食系やアトラクション系もいいけど、参加型の催し物もいいかなって思ったのよ。ただ、参加型にすると儲けがないけどね」

その後、二人は会話を楽しみながらいくつも案を出した。ノート

に書き留められた案は、十を超えていた。中には画期的で面白いものもいくつかあった。それらの大半は桜庭が出した案だった。

会話が途切れ、教室が静まり返ったときだった。桜庭に見つめられ、俊は思わず顔を赤らめ、桜庭から目を逸らした。

「ねえ、話変わるけど一つ訊いていいかな？」

桜庭が徐に口を開いた。

「なに？」

「甲斐谷くんてさ、好きな人いる？」

「えっ……」

桜庭の質問に俊は少し動揺した。意表を突かれた思いの質問だった。

「別にいないけど」

「そう……」

桜庭は意味ありげに、にやりと笑った。

「それなら、あたしと付き合っちゃう？」

「……………」

一瞬、耳を疑った。返答に窮し言葉を失った。

「冗談よ、冗談。残念ながら、あたしには好きな人がいるから」

桜庭は笑いながら言った。俊はほっとしたような、残念なような複雑な心境だった。

「そうなんだ」

「片想いだけだね。いつか想いを伝えなきゃって思ってる。言わなきゃ、想いは伝わらない。ずるずる想いを引きずっちゃうだけじゃ、苦しいもんね」

「好きな人って誰？」

「ひ・み・つ」

桜庭は目を細めくすりと笑った。

「あたし、そろそろ部活に行くね」

桜庭は席を立つと、扉に向かって歩き出した。扉を前にして、桜庭は俊のほうに振り返ると人差し指を立て、口を開いた。

「あたしの好きな人は秘密だけど、君に一つヒントを差し上げよう。あたしの好きな人はね、遠くはなくてすごく近い存在の人だよ」

そう言っ、桜庭は教室を出ていった。一人取り残された教室で、俊は桜庭の言葉を反芻してみた。誰だろうと、考えてはみたが思い当たる人物は特にいなかった。人気なだけに、彼女の周辺はあまりにも人が多い。その中に俊もいるのだろう。

まさか　と、一瞬期待してしまったが、それはないだろうと即座に否定した。

その後も、俊たちは放課後や昼休みに集まり文化祭の催し物について様々な案を出していった。最終的に俊のノートには三十余りの案が書き留められた。焼きそばやたこ焼きやお化け屋敷など定番のものから、バルーンアート選手権やコスプレ発表など参加型の催し物などがある。中には、すぐさま生徒会に棄却されてしまいそうなくならないものまであった。量より質　ではなく、質より量だ。二人はできる限り思いつくだけの案を、それこそまさに無闇矢鱈と出していったのだった。

そして二週間ほどが経った頃だった。ホームルームが終わってから高根が言った。

「今から文化祭の催し物について決めよう」

ざわついていたクラスは途端に静まり返った。かばんに教科書を詰め込みながら、帰り支度をしていた者の手は止まり、露骨に嫌そうな顔に変わった。またもごもごと文句を垂らしている連中もいた。放課後がそんなことのために潰されるのは誰だって嫌だろう。

そんなクラスの雰囲気を感じてか、高根はうんうんと頷いていた。「あまり時間は使わない。そのために文化祭実行委員の二人には、前もって案を出しておいてもらったからな」

嫌そうな顔をしていた者は、ほっとしたような安堵の色に変わった。高根の目論見通りといったところか。無駄な時間を浪費しない

ために、文化祭実行委員に案を出させた。

「いくつかは文化祭実行委員が案を出してくれたから、それで多数決を採っていいこう。まだ出ていない案があつて、それがやりたいと思うなら、遠慮なく言ってくれ」

高根は俊と桜庭を呼んだ。二人は担任教師に促されるまま教壇に立った。俊はノートに書かれている案を黒板に書いていった。

「ここに書かれている案以外に、なにかやりたいことあるかな？」

俊が書き終えてから、桜庭が教室を一瞥して言った。首を傾げ考えている者や、唸っている者はいたが、はっきりとした反応は返ってこなかった。さすがに三十以上も案があると、それ以上案が出る期待は薄い。

「どうかな？」

桜庭は間を置いてから、もう一度訊いた。

しかし新たな案が出る気配はなかった。そこで多数決が採られることになった。

多数決によつて大半を占めたのが、モノマネ大会と喫茶店だった。飲食系と参加型で見事に分裂した。そこで俊が提案した。

「喫茶店の中に、いろいろ設けてみてはどうかな。モノマネ大会とか占いとか。そのかわり俺たちの仕事が大変になるだろうけど」

「それいいね。喫茶店で儲けも出るし、参加型のイベントを設ければ、人を集められる」

桜庭が俊に賛成した。

文化祭で得た儲け分は、そのクラスに配分される。後の打ち上げなり、募金なり、その使い道は自由だ。黒字といつても、所詮は高校の文化祭だ。大した儲けが出るわけではなく、一万円以上出ればいいほうだ。

「どうかな？」

俊はクラスを一瞥し訊いた。その中の一人が手を叩き、また一人が手を叩き、クラスは瞬く間に拍手に包まれた。満場一致で、俊たちのクラスは喫茶店と平行して、モノマネ大会などのイベントを設

けるという案で決定した。後は生徒会がそれを許可するかどうかだ。
「俺からも一つ提案があるんだけど」

春樹が手を上げて言った。にやにやとした顔つきだった。なにか企んでいる顔だ。

「喫茶店のことなんだけども、女子はメイド姿で接客するってどう？」

この案に、大半の男子が賛成した。一方で、女子は五分五分だった。結局、それも多数決が採られ、女子でやりたい人だけがメイド姿で喫茶店のウェイトレスをやるということになった。メイド服を着ない者は、調理やイベントのほうに徹することになった。

「メイド服はどうやって用意するの？ みんなの予算を集めてもそんなに用意できないでしょ」

桜庭が春樹に訊いた。

「それなら問題ない。知り合いの人で、服を作っている人がいるから、頼んでみるよ。文化祭までまだ時間があるから、必要な数だけ用意できると思う」

放課後、俊は部活のなかった春樹と一緒に帰ることにした。こうだったことは滅多にないのだが、春樹の部活がない日は彼から一緒に帰らないかと誘ってくれる。俊にとっては嬉しいことだった。

俊が木碕大学付属木碕高等学校に入って、最初に声をかけてくれたのが隣の席の春樹だった。春樹はメガネをかけていて明るい感じだった。背は高く、笑ったときに覗かせる白い歯が健康的だ。サッカー部に所属している春樹の黒く日焼けした肌は、今も変わらない。だが一つ変わったことがあった。この春から春樹はメガネを止め、コンタクトレンズに変えたのだ。

レンズが割れて目を傷つけてしまう恐れがある、というのがコンタクトレンズに変えた理由だった。どうやら、メガネはスポーツ向きではないようだ。

サッカーにおいて、彼のポジションはミッドフィルダーである。

その中でも、特にセンターミッドフィルダーを得意とするポジションらしい。彼曰く切れ味鋭いドリブルを武器としているらしい。レギュラーではないが、控え選手である。

「やっぱり桜庭に告白したら」

自転車を押していた春樹は立ち止まって口を開いた。

「いきなりなんだよ」

「まだ桜庭のこと好きなんだろ？」

俊は一瞬迷ったが、春樹にうそをつく必要もないだろうと思い頷いた。

「俊なら上手くいくと思うんだけどな」

「どうしてそう思う？」

「うーん、なんていうか……」

春樹は短い髪の毛をぼりぼりと掻き、返答に窮した。困惑した顔で、言葉を探しているようだった。

「第三者から見ての印象なんだけど、二人っていい感じだなと思ってさ。それにお前たちって、一緒になることが多いだろ」

「一緒になること？」

「役員だつてそうだし、席も隣だろ」

「そうだけど。でもそれは偶然だよ。だからって上手くいくとは限らない」

そう言われると、春樹も反論の余地がないらしく、黙ってしまった。

「でも、俺はきつと上手くいくと思ってる。結局のところ、告白するかどうかは俊次第なんだけだな」

春樹はきっぱりと言い放った。勢いに任せ、根拠のない発言だ。これきり春樹は桜庭のことについて触れることはなかった。もし、俊が桜庭に告白するというのなら、それは天使を捨てるということの意味する。今の俊には、そこまで踏み切れない。だから、告白なんて絶対できない。

だがその一方で、桜庭への気持ちを拭い去れずにいるというのも事実だ。それに、春樹はそう言うが、絶対という確信が俊になかった。

しばらく二人で歩いていると、前から同じ制服を着た男が歩いてきた。男は髪の毛がやや茶色く染まっでいて、日焼けした肌をしていた。多分、屋外の運動部に所属しているのだろう。鼻が高く、小さな顔をしていた。

俊はその男からなにか嫌なものを感じた。不気味で黒い得体の知れないものが、彼を包んでいるかのような感じた。胸騒ぎを覚えた。春樹が足を止め、俊も反射的に立ち止まった。

「どうしたんだウリユウ？」

男とすれ違う前に、春樹が男に声をかけた。男も立ち止まった。

「学校に忘れ物をしちゃってさ」

ウリユウと呼ばれた男が答えた。

「ふうん、それで学校に向かう途中ってわけか」

「そう。じゃあ、俺急いでるから」

男は学校に向け歩き出した。春樹は振り返り、

「次の試合頑張れよ」

と彼の背中に向かって、声をかけた。

「ああ、三ゴールは決めてやるよ。期待しとけ」

男は振り返ることなく言った。その後手を上げると、ゆらゆらと振った。

「誰？」

「俺と同じサッカー部だ。俊も名前くらいは知ってるんじゃないかな」

俊は首を傾げた。ウリユウ、と聞いて思い出す人物はこれといっていないかった。

「今年転校してきた、ウリユウヒカルだ。俺たちの隣のクラスのやつ」

「あいつが……」

やつと思い出した。もう一度彼の姿を拝もうと振り返ったが、既に彼の姿はなかった。

今年の二月の寒い日に、一人の転校生がやってきた。それが瓜生光だった。瓜生は、日本人離れした美貌で、転校してくるなりクラスの注目の的となった。運動神経もクラスの誰よりもずば抜けていたようだ。その運動神経を買われ、彼のもとにはサッカー部や野球部といったスポーツクラブからの勧誘が殺到したようだった。そして彼は今、サッカー部に所属している。

「あいつサッカー上手くてさ。二年でレギュラーだぜ。レギュラー選考の紅白戦のときなんて、誰よりも注目を集めてたな」

「へえ……」

「監督の先生なんか、これからは楽しみだななんて期待してるくらいだからさ。相当すごい実力なんだろうな」

サッカーにおいて、春樹はかなりの実力者だ。だが、それでもレギュラーメンバーではなく控え選手である。その春樹が、必要以上に瓜生を讃美するのはその実力を認めている証拠だろう。

「でも、あいつって謎多き人物なんだよな」

春樹は途端に妙な顔つきになり、ぽつりと言った。

「謎多き人物？」

「以前に、前の学校はどこだったかって聞いたことがあったんだけど、教えてくれなくて。他にも瓜生はプライベートなことはあまり話さないんだよ。なにか隠しているのかな」

「誰にも秘密にしたいことの一つや二つはあるさ。瓜生は、特別プライベートに関しては、あまり他人に踏み込まれたくないだけじゃない」

瓜生光　彼から感じた嫌なものはなんだったのかと俊は考えた。黒くて得体の知れないもの。瓜生は装っていると直感的に思った。いや、装いとは違うものなのかもしれないが、極めてそれに近いものだろう。しかし、現状では彼の正体はわからない。なにかもやもやとしたものが、俊の胸に残った。

文化祭が近づくにつれ、文化祭実行委員の二人は放課後の時間を使って、準備をすることが多くなっていた。教室の飾り付けやモノマネ大会の特設ステージの設置など、準備することは山ほどあった。二人だけではとても準備が捗らないので、時間の持て余しているクラスの間中が何人か協力した。

俊にとっては面倒なことだったが、嬉しいことだった。桜庭と率先して共同作業をする時間がなによりも楽しかった。たわいない話をして笑って時間を過ごしたり、共同作業で一緒に汗を流したり、俊にとっては最高の時間だ。

しかし、桜庭には部活があった。彼女が部活に行っているとき、俊はいつも物足りなさを感じてしまう。桜庭がいてこそ、文化祭の準備の遣り甲斐があると感じていた。だがそんなときでも、俊は腐ることなく率先して準備に励んだ。

クラスの連中はいつも手伝ってくれるというわけではなかった。俊と桜庭の二人だけという日も、何日かあった。そのときは、俊はいつも以上に準備に励んでいた。

文化祭を数日後に控えたある日、俊と桜庭が二人だけで準備をしているときだった。学習室は本番に向け、だいぶと準備が整っていた。壁は色紙などで飾りつけが施されており、机や椅子などには必要な数だけを残し、ほかは既に別の教室に移してある。

さらにモノマネ大会の優勝者への商品として、担任教師が用意した豪華商品も既に用意されていた。豪華と言えるのかどうか、微妙なものなのだが。

高根が胸を張って豪華商品と言ったのが、カップラーメン三十個だ。段ボール箱二つ分に詰め込まれている。その段ボール箱は、モノマネ大会専用に用意された特設ステージの隣に二つ積み重ねられている。準備を始めてだいぶ時間が経っていたので、今日は誰も来ること

はないだろうと俊は思っていた。が、その思いを打ち砕くように、勢いよく学習室の扉が開けられた。

教室に入ってきたのは、春樹と藤崎だった。珍しい顔ぶれだった。藤崎も桜庭と同じくバレー部に所属しているが、身長は桜庭ほど高くない。それでも女子生徒の中では比較的高いほうになるだろう。肩にかかるくらいの髪をポニーテールにし、ほっそりとした身体をしている。

この二人は部活が忙しかったということもあり、滅多に準備の手伝いに来なかった。それなのに今日に限っては、二人揃って顔を出したのだ。

「結構進んでるようだな」

春樹が教室をぐるりと見回して言った。

「なんでここに？」

俊が尋ねた。

「麻由に呼ばれたんだよ。今日はバレー部も部活ないからね」

藤崎が答えた。

「桜庭が……」

「手伝ってもらおうと思ってね。それで千春と織田くんを呼んだの」「そういうことだ」

にっと笑みを浮かべた春樹は、俊のほうに歩み寄った。そして俊に顔を近づけると、

「悪いね、二人だけの時間を邪魔して」

と彼女たちに聞こえないように、声を押し殺してからかうような口調で言った。

「別に……」

俊は素っ気無く返した。正直なところ、二人が来て残念だという思いはあった。それを顔に出さないように装うとしたが、無理だったようだ。

「そうむっとするなって。情報仕入れてきてやったから、教えてやるよ」

「情報？」

「俊にとつては朗報とは言えないけどな。知りたいか？」

俊は少し考えた末に頷いた。

「じゃ、外で話そう」

俊と春樹は彼女たちを教室に残し、廊下に出た。どうやら彼女たちに聞かれてはまずい話らしく、春樹は学習室から離れるように廊下を歩き出した。俊はその後についていった。しばらく歩いたところで春樹は足を止めた。

「で、情報ってなに？」

「桜庭に関することだ」

春樹は窓の外に目を向け言った。

「桜庭に関すること？」

俊は繰り返した。一体、桜庭に関することとで自分に悪い情報とはなんだろうか、と思考を巡らせてみたが思い当たる節は一つしかなかった。

「実は、瓜生も桜庭のことが好きらしいんだ。で、あいつはそのうち桜庭に告白するかもしれない。本人が言っていたから確かだ」

「ふうん、情報ってそれだけか」

「それだけ……って」

春樹は俊のほうに顔を向け睨んだ。

「このままで本当にいいのか。俊が告白しなければ、桜庭は瓜生と付き合うことになるかもしれない。後から後悔したって遅いんだぞ」

春樹の語気は強かった。

俊はそれでもいいかもしれないと思った。もし、桜庭が誰かと付き合うようなことになれば、彼女をきっぱり諦めることができるかもしれない。どうせいつかは捨てなければならぬ感情なのだ。そのきっかけが必要だった。

「付き合うかどうかは桜庭が決めることだろ。多分それはないと思うけど」

「どうして？」

「桜庭には好きな人がいるようだし」

「好きな人って誰？」

「さあ、わからない。でも、遠くはなくて、すごく近い人だって言
ってただけ……」

春樹はため息をつき、呆れた顔で俊の顔を見た。

「それってさ、俊のことなんじゃないの？」

「えっ！」

春樹の思わぬ言葉に、俊は目を見張った。一方的な片想いで、桜
庭が自分に好意を持つなど少し期待しただけで、それも即座に否定
した。いや、そう思いたくなかったただけなのかもしれない、と冷静
に分析してみた。

恋愛感情はいずれ捨て去らなければならない感情、と考えると一
方的な片想いだと思い込んでいたほうがよっぽど安全だ。両想いか
もしれないと期待を膨らませてしまえば、恋愛感情を捨て去る覚悟
ができなくなってしまう恐れがある。それを避けるため、両想いと
いう可能性は拭い去ることにした。

それに両想いだしたら、お互いが傷つく結果となってしまうだ
けだ。叶わぬ恋なんて、恋することさえ禁じ手なのだが、片想いな
らばまだ傷も浅くてすむ。自分自身の問題で、決着をつけるのも自
分次第だ。

遠くはなくて、すごく近い存知の人　言葉だけを当てはめてみ
ると、そうかもしれないと俊は思った。だがそんなことはない、と
すぐに自分の中で否定した。肯定してしまえば、引き返すことがで
きなくなってしまうかもしれない。

「告白するかどうかは俊の自由だから、これ以上は言わない。悪か
ったな」

春樹はため息混じりに言った。

二人は無言のまま学習室へと戻った。学習室の扉からは、彼女た
ちの談笑が漏れていた。

教室に入ると、既に仕上がった看板が俊の目に飛び込んできた。

先ほどまでは何も書かれていなかった看板だったが、二人が話をしている間に出来上がったようだ。綺麗なポップ体の字で『ユトリとワライの空間』と書かれていた。その周りには、色紙で折られた花で綺麗に装飾が施されていた。

「そういえば、メイド服のほうはどうなってるの？」

ふと思いついたというような顔で、桜庭が春樹に訊いた。

「それなら大丈夫だ。ちゃんと人数分用意できている」

それを聞いて、桜庭は残念そうな顔をした。

「足りなかったら、あたしは着なくて済んだのに……」

桜庭はぼつりと呟いた。

桜庭もメイド服を着ることになっているのだ。最初は嫌だと否定していたのだが、藤崎に文化祭実行委員なのだから、と推されて渋々着ることになった。それはクラスの男子にとっては嬉しいことに違いない。誰もが彼女のメイド姿を見たいと思っているだろう。もちろん、俊も例外ではない。桜庭のメイド姿を拝めると思うと心が弾んだ。

「残念だったな。桜庭のメイド姿を、男子の誰もが期待しているんじゃないかな」

にやにやとした顔つきで春樹が言った。桜庭は小さくため息をついた。

「私のメイド姿には期待してないわけ」

藤崎もメイド姿で接客を任されている一人だ。

「桜庭に比べたら、足許にも及ばないだろ」

「ひどーい」

藤崎はむっと頬を膨らませた。

「うそだよ。千春のメイド姿にも期待してるって」

春樹はにつこりと笑った。藤崎は少し頬を赤らめ、うつむき加減で、

「本当に？」

と確認するように言った。

「ああ、俺はな。だけど、クラスの連中はどう思っているか知らないけど」

桜庭はそんな二人のやり取りを楽しむように、表情を緩ませ眺めていた。このとき、俊は二人の間に確信めいたものを感じた。

その後の準備のほうは、春樹と藤崎の手伝いのおかげで、だいぶと仕上がった。二人の手伝いが必要になれば、間に合わなかったかもしれないと俊は思った。

四人が学校を出た頃にはすっかり陽が落ちていた。十月中旬の夜ともなれば、だいぶと気温も下がり肌寒くなっていた。

文化祭は二日間設けられていた。一日目は生徒たちだけの文化祭だが、二日目は一般公開される。少し文化祭を見にこようと、近所の人や生徒たちの保護者、小学生や中学生たちが訪れるのだ。小学生や中学生は専ら、模擬店やイベントが目的なのだろう。それを狙って、ターゲットを彼らに絞ったイベントも少なくなかった。

当日、俊たちの喫茶店は大いに盛り上がっていた。学習室の前に掲げられている立派な看板。教室内はB G が流れ、それなりに雰囲気漂った空間となっていた。表向きは喫茶店となっているが、その中では、モノマネ大会や一発芸大会といったイベントが行われている。無論、コーヒーや紅茶などを飲みながら寛げるスペースもある。

一日目の文化祭を終えて、俊たちのクラスはまずまずの売り上げを出した。二日目でなんとか黒字にはなりそうだが、それでもまだ赤字だった。

モノマネ大会と一発芸大会はそれなりに人気を博し、その観覧に喫茶店を利用する客が絶えなかった。

もう一つ人気があった理由として、女子生徒たちのメイド姿が挙げられるだろう。そのためか、喫茶店内は男性客が大半を占めていた。客層がどうであろうと、客が入ればそれだけ稼ぎが出るので、そのところは気にしない。それは女子生徒たちも心得ていることだ。

中には喫茶店というスペースを利用して、なにもせず何時間も寛いでいく輩がいた。売り上げが延びなかった原因はそこにあるのかもしれない。喫茶店と平行してイベントを設けたため、席は限られてくるし、客の入る人数もたかがしれている。だからといって、無理矢理客を追い出すことはできない。そんなことをすれば、評判は悪くなり二日目の売り上げに影響が出てくることは必至だろう。

そこで、二日目は時間制限を設けることにした。大会にエントリーしていない喫茶店利用者は一人二十分と設定した。そうすれば、一日目よりは客が増え、売り上げも延びるはずだ。

俊たちの目論見通り、二日目は順調に売り上げが延びていった。例によって、モノマネ大会や一発芸大会は相変わらず人気だった。優勝者には商品があるのだから、それが更に拍車をかけているのかもしれない。俊たちは接客をしながら、それを見ることが可能なだからまさに一石二鳥だ。

「大成功だね」

メイド姿に扮した桜庭が、教室内を見渡し言った。教室は笑いに包まれ、相変わらず人で溢れている。

「そうだな。桜庭の奇抜なアイデアが功を奏した、と言ってもいいんじゃないかな」

桜庭は照れたように笑った。そんな彼女の笑顔も可愛いなと俊は思った。思わず見とれてしまいそうになる。

「二人とも暇？」

接客をしていたメイド姿の藤崎が、突っ立って教室を眺めていただけの俊たちに声をかけた。

「俺は特にやることないけど」

俊が声を大にして答えた。そうしないと、笑い声にかき消されてしまうほどに、教室内は盛り上がっている。藤崎は一つ頷くと、両手に籠を持って二人のところへやってきた。二つの籠の中には、クッキーの入った袋が一杯に入っていた。ざっと三十袋ほどありそうだ。

「二人でこれ売りさばいて来てくれない」

藤崎は俊に籠を差し出した。

「マジで……」

ため息をつきながらも、俊は二つの籠を受け取っていた。同時に、一つ二つと目で袋の数を数えていった。それを数え終える前に藤崎が口を開いた。

「あ、籠には三十四個入ってるから。なんかクッキーの売れ行きが悪くて」

「そんなに残ってるの？」

「へへへ……調子に乗って作りすぎちゃったかな」

藤崎はぺろりと赤い舌を覗かせた。

「じゃ、二人でよろしくね」

藤崎は二人で、という言葉強調して言った。その真意はわからないが、意味ありげに思えた。

「ちよつと待つて。あたし、この格好で出歩くの恥ずかしいんだけど……着替えていいかな」

「だめ！」

更衣室へ向かおうとした桜庭を、藤崎は腕を掴んで止めた。

「麻由はその格好じゃなきゃ意味がないんだから」

「どうして？」

桜庭は藤崎の意図が掴めず、小首を傾げた。俊はなんとなく藤崎の思惑を察していた。桜庭のメイド姿を利用して客を集めようという企みだろう。

「その格好で売ってこそ売れるものじゃない」

「そうなの？」

「そうそう。それにクラスの宣伝にもなるしね」

藤崎はにやりと笑みを浮かべた。そして俊のほうに向くと思いついたように付け加えて言った。

「あ、そうそう、甲斐谷くんはこれを着てね」

藤崎は白いエプロンを俊に渡した。

「なんだ、これ？」

「宣伝よ」

藤崎に言われるままそのエプロンを着て、宣伝という意味がわかった。胸の辺りに、「喫茶店『ユトリとワライの空間』 2 6 学習室」と刺繍が施されていた。

「なるほど、宣伝ってこういうことか」

「じゃ、よろしくね。全部売りさばくまで戻って来ちゃだめだよ。こっちは大丈夫だから」

そう言い残し、藤崎は春樹のところへ向かった。今度はモノマネ大会の司会を任されている春樹に、なにかを指示しているようだ。彼女はこういったイベント時のまとめ役に向いているのかもしれない。前期に学級委員長を務め、クラスをまとめてきただけのことはある。

二日目に、喫茶店に時間制限を設けてはどうかという案を出したのは藤崎だった。一日目の文化祭を終え、売り上げが延びなかったことの対策について話し合っているとき、誰もがそれに悩んでいた。イベントを止め、喫茶店だけに徹するのはどうかという意見も出たが、それは即却下された。一日目の様子を見て、イベントを設けることによって、客が集まって来ているようなものだった。

そして藤崎が提案したのだ。彼女の提案は、喫茶店利用者に時間を設けることだった。だがそうすると、利用者が減ってしまうだろうという反対意見も出たが、それについても彼女はちゃんと考えていたようだ。時間を設ける代わりに、飲料と食べ物を注文した人には割引をしようと提案したのだった。その案は、クラスの誰をも納得させるものだった。

それにこの籠のクッキーは、実は宣伝のために、意図的に用意されたものではないかと俊は考えていた。その宣伝に人気のある桜庭を起用し、しかもメイド姿ともなれば、食いつかない男子はいないだろう。全て藤崎の思惑通りに事が運んでいるように思えてならない。

「仕方ないな。これ売りさばきに行くか」

俊は長いため息をついた。桜庭はうつむき、もじもじしている。まだ躊躇っているようだ。

「桜庭が行きたくなかったらそれでもいいよ。俺一人で行ってくるから」

「うつん、あたしも行くよ」

俊は籠を一つ桜庭に渡した。

まず、俊と桜庭は体育館前へ足を運んだ。体育館では生徒たちによるライブが行われている。文化祭で人が集まる場所の一つだ。

二人は、体育館の出入り口付近でクッキーを売ることにした。体育館内への飲食物の持ち込みは禁止されているため、館内で売ることとはできない。

「美味しいクッキーはいかがですか。手作りクッキーはいかがですか。」

俊は声を大にして言った。それでも体育館から漏れる音響にかき消され無意味だった。

体育館を出入りする人は二人の姿に気づくと、二人の許へ集まってきた。心なしか、男子生徒が多いのはメイド姿の桜庭を一目拝むためなのかもしれない。桜庭の頬は赤かった。やはりメイド姿で歩くのは恥ずかしいようだ。それに加え、注目を集める存在なのだから尚更だ。

二人は営業スマイルを振りまき、クッキーを売りさばいていた。結果、体育館前では一筆分のクッキーを売りさばくことに成功した。そして二人は売り場を変えることにした。

次に選んだ場所はホールだった。下駄箱を抜けると、すぐにホールになる。この場所は人が集まるというより、通りになる場所だ。このホールを中心に、様々なイベント会場に繋がっている。一番人目につきやすい場所というわけだ。そのため、俊たち以外にも催し物やイベントの宣伝をしている人たちが何人が目に付く。

二人は体育館前と同じように、クッキーを売りさばいていた。売れ行きは順調で、残すクッキーはあつという間に三袋だけとなった。

俊は近くの椅子に座った。その隣に桜庭が座った。

「あつという間だったな」

桜庭はうんと頷いた。

俊は腕時計に視線を落とした。クッキーを売り始めてまだ四十分

ほどしか経っていなかった。

俊は籠の中のクッキーの袋を一つ手に取った。ハート型、星型、スペード型と様々な形のクッキーが入っている。茶色のチョコレート味や緑色の抹茶味といったクッキーも入っていた。

「このクッキーってさ、女子が作ったんだよな」

「そうだよ」

「桜庭が作ったのも入ってるの？」

「うん。形と味ごとに分担して作ったんだ。あたしが作ったのは、星型のチョコレート味」

「へえ……せつかくだし、一袋もらっちゃお」

俊はクッキーの入った袋を開けると、星型のクッキーを取り出し口に運んだ。チョコレートの匂いと甘い味が口の中で溶け込むように広がった。

「けっこう美味しいじゃん」

「クッキー作りに携わった人たちは、みんな料理が好きな人だったからね」

桜庭は俊の持つ袋から、クッキーを一つ取り出すと口に運んだ。

「上出来だね。こんなに美味しいのに、売れ行きが悪くて残念だったな」

「残りは二つか……俺たちで食べちゃう？」

「いいね」

残りの二袋は二人で分け合うことにした。楽園へのお土産にしようかと一瞬考えたが、すぐに棄却した。後一年余りも、手作りクッキーが持つとは思えない。

天使たちは下界の食べ物を口にすることが滅多にない。それゆえに、一度、下界の食べ物を食べてみたいと思う天使が、何人かいることを俊は知っている。

売りさばくのにこれほど早く終わると思っていなかった俊は、いろいろ見て回ってから戻らないか、と桜庭に提案した。桜庭は少し逡巡した様子を見せたが、間もなく大きく頷いた。どうせ戻った

ところで、こき使われ忙しさに追われることだろう。

結局、二人が学習室に戻ったのは午後二時過ぎだった。クッキー売りを始めて、二時間後のことだ。二人でいろいろな催し物なり、イベントなりを見て回っていたら、つい時間を忘れてしまっていた。学習室の前までやってきて、長蛇の列が目に入り俊は目を丸めた。どうやら順番待ちの人たちのようだ。並んでいる大半は男性客だった。やはり、メイド姿がかなり効いているらしい。無論、宣伝の効果もあるだろう。

学習室に入るなり、藤崎が営業のときとは似ても似つかわしくない形相で、二人のところにやってきた。

「遅い！　いつまでかかってんのよ」

「ごめん。全然売れなくてさ」

俊はうそをついた。そんな俊を見て、桜庭はくすりと笑った。

「なんで笑うのよ」

「ごめん」

「はあ、なるほどね……」

藤崎は不適に笑みを浮かべてみせた。

「デートは楽しかった？」

「ちよつと、デートなんかじゃ……ただ、売れ行きが悪かっただけで……」

慌てた様子で、桜庭は否定した。顔は真っ赤だった。ねえ、と確認をするように言われ、俊は無意識のうちに頷いていた。

「そう、そんなに売れ行き悪かったんだ。残念」

藤崎はがつくりと肩を落とした。俊はうそをついたことで、少し申し訳ない気持ちになった。だが、売れ行きは絶好調だったと改めて言い直せば、うそをついたことがばれてしまう。

「まあ、それでも全部売れたわけだし。終わり良ければ全て良しでしょ。こっちのほうはどう？」

「見ての通り大繁盛。お客さんが入らなくて順番待ちをしてもらってるくらいだもん」

俊は教室を一瞥した。教室内も、やはり男性客が多かった。中には携帯電話で女子生徒のメイド姿を写真に撮っている者もいた。「やっぱり、男性客が多いな」

「どうせメイド姿が目的でしょ。まあ、そのおかげで、こっちも稼げてるんだけどね。それに……」

にやりと笑みを浮かべた藤崎は、桜庭のほうに顔を向けた。

「麻由を宣伝に使って正解だったわ。こんなにお客さんが来たのも、少なからず宣伝の効果が出ているって証拠だろうしね」

「どういうこと？」

桜庭は首を傾げた。やはりな、と俊は自分の考えが正しかったことを確認した。

「麻由がメイド姿で宣伝をしてくれたおかげで、この喫茶店に来ればメイド姿が拝めるだろうと思った輩が来たってわけ。だから麻由はメイド姿じゃなきゃだめだったのよ」

桜庭はあつと言って、手で口を覆った。自分が上手いように利用されていたことに、やっと気づいたようだ。

「ひどーい。あたしは上手いように利用されてたってわけ。千春のバカ！」

「ごめん、ごめん」

藤崎は謝ったが、顔は笑っていた。

「でもね、麻由は格別に可愛いんだから、こういう役は麻由以外にいないと思うんだよね」

「うん、俺もそう思う」

無意識のうちに、素直な肯定が口をついて出た。桜庭は照れながら、

「でも、この格好はやっぱりきつかったよ」と言った。

「ごめんね。今度なにか奢ってあげるから。さあ、二人も仕事に戻って」

藤崎は俊と桜庭の腕を掴むと、強引に教室に引き込んだ。そして

二人は各々与えられた仕事に戻った。

その後も、喫茶店は客が絶えることがなかった。教室の中は常に人で溢れ返っており、引つ切り無しに注文が飛び交った。そのため、休む暇も無く調理や接客にあたらなければならなかった。『ユトリとワライの空間』らしく、喫茶店利用者は寛ぎつつもモノマネ大会を観戦し、終始ワライの絶えない空間だった。盛り上がりだけは、他のどのクラスにも負けていないだろう。

文化祭は午後三時半に幕を閉じた。閉会式では、学年ごとに催し物売り上げランキングが発表された。俊たちのクラスは売り上げランキングで二位だった。一位には後一步及ばなかったが、それでも僅差だった。

その後、教室でホームルームを終え、文化祭実行委員の二人は、後片付けに追われることとなった。準備のときと同様に、クラスの何人かは二人を手伝った。

壁の飾り付けを剥がし取ったり、移動した机や椅子を戻したりと後片付けも大変だった。だがそれも彼らの手伝いがあつて、あつという間だった。一段落着いたところで、

「後は俺たちでやつとくから、みんなは帰っていいよ。ありがとな」と学習室全体に行き渡る声で俊が言った。それを合図に、何人かがぞろぞろと教室を出ていった。

最後まで二人の手伝いに残ったのは、春樹と藤崎だけだった。後少しで片付けが終わるところで、二人も教室を出て行った。教室を出る間際、藤崎は桜庭にウイंकを投げかけていった。それがないを意味しているのか俊にはわからなかったが、桜庭は微笑んだかと思うとすぐに目を伏せた。

二人が出ていって、しばらく沈黙が続いた。桜庭は喫茶店で使用した机を拭いていた。俊は残された壁の飾り付けを剥がし取っていた。教室は片付け始めた頃の騒がしさはなく静まり返っていた。

「文化祭楽しかったね」

桜庭が片付けの作業をしながら徐に口を開いた。

「うん。文化祭実行委員も大変だけど悪くないな」

「そうだね。甲斐谷くんと一緒によかったよ」

「えっ、どういう意味？」

俊は手を止め、桜庭のほうに顔を向けた。

「きつと甲斐谷くんだったから、楽しくできたんだと思う。他の人だったらどうだっただろ」

「別に俺じゃなくても楽しくできたんじゃないかな。もし俺じゃなくて春樹だったら、春樹のほうが俺よりノリはいいだろうしさ」

そうかも、と言つて桜庭は笑った。桜庭は手を止め、俊のほうに顔を向けた。真剣な眼差しにはなにか決意が込められているように思えた。

「あたしたちが最初にこの教室に集まったとき、あたしが冗談で言つたこと覚えてる」

「なんて言つたかな？」

忘れるはずがない。もちろん覚えていたが、俊はとぼけた。

「あたしと付き合っちゃうつて言つたこと」

桜庭はもごもごと、少しうつむき加減で言つた。

「ああ、そういえばそんなこと言つてたな」

うんうんと頷き、今思い出したという風に装つた。

「甲斐谷くん……」

桜庭は俊の顔を真つ直ぐ見つめた。

「あたし、甲斐谷くんともっと一緒にいたい。あたしと付き合つてくれない」

「え、じょう」

「冗談じゃない！ あたし本気だよ！」

俊の言葉を遮り、桜庭は力強く言つた。

俊の胸は高鳴っていた。顔が妙に熱く感じ、桜庭のほうに顔を向けているのが耐えられなくなり、彼女から目を逸らした。頭の中は

すっかり混乱していた。

「でも桜庭には好きな人が……」

そこまで言って、俊はたと口を塞いだ。

「もしかして、桜庭の好きな人って……」

桜庭はこくりと頷いた。

春樹の言っていたことは間違いではなかったようだ。桜庭も俊に對して想いを寄せていたということ。俊の恐れていた、お互いが両想いだったということだ。

「ずっと前から、甲斐谷くんのが好きだったの。一目惚れ……
っていうのかな。だけどずっと言えなくて、気持ちだけずるずる引
きずってた」

「ごめん……」

俊はうつむき、小さな声で言った。

「……………」

「ごめん。俺、桜庭とは付き合えない」

俊の頭に天使の掟が過ぎった。天使は人間に恋してはいけ
ないその思いが、迷いの残っていた俊の背中を後押しした。

一瞬、教室内は重い空気に包まれ、沈黙が支配した。俊にはとて
も長い時間のように思えた。

「そっか。いきなりでごめんね」

桜庭は明るく言った。

俊は顔を上げ、彼女の顔を見た。彼女は笑顔を浮かべていたが、
どこかぎこちなさを感じた。無理に笑顔を装っているということが
明かだった。

「あたし調子乗ってたみたいね。ほんと、バカみたいだよ。甲斐谷
くんと一緒にすることが多くて、楽しい時間も過ごせて、このまま
告白すれば上手く行くかもって思ってたんだけど、あたしの勘違い
だったみたいね」

桜庭は自嘲気味に笑った。桜庭の台詞が春樹の台詞と被り、俊は
ふと思い当たることがあった。

桜庭の目には涙が滲み出していた。桜庭はくりりと俊に背を向けると、

「ちょっと外の空気吸ってくる」

と言つて、教室を出て行こうとした。

「待って！」

俊は桜庭を呼び止めた。

「その……ずっと前からって、いつからだったの？」

「甲斐谷くんと出合つたときから。あたしが、声をかけた日のこと覚えてる？」

俊はその日のことを思い出した。時子の家を訪れようとしていたときのことだ。紙片に目を落とし、困惑を浮かべていた俊に声をかけてきたのが桜庭だった。

「あたしつてさ、変なところで積極的になつたりするんだよね。だから、初めて会つた人でも興味を持てばいろいろと聞きたくなっちゃうし、そのくせ恋愛に関しては素直になれず、奥手になっちゃうの。告白まで後一步が踏み出せなくて、ずっと想いを引きずっちゃうんだ。今まで片想いで終わつた恋は何度かあつたの。その度、今度こそはって、いつも自分に言い聞かせてた」

桜庭の肩は小刻みに震えていた。

「でも、なんで俺だったの。ほら、俺は別にかっこいいわけでもなく、外見は至つて普通だよ。そりゃ、頭はいいほうかもしれないけど、桜庭みたいにみんなから好かれるような要素は持つてないし」「一目ぼれに、理由つて必要かな。それじゃ一目ぼれとは言えないんじゃないかな。それに、一目ぼれてそれぞれの人の観点によつて違うものだと思うよ」

俊は反論できず、口を閉ざした。彼女の言う通りだ。俊にしても、なにか理由があつて桜庭に惚れたのではなかった。

いきなりのことだった。そして気づけば、彼女に想いを寄せていた。一目ぼれは突然のことで、自ら告白しない限り片想いなのだ。

桜庭は教室を出ていった。空しく廊下に響く彼女の足音は、すぐ

に遠ざかっていった。

一人教室に取り残された俊は、崩れるようにして椅子に座り込んだ。頭の中は真っ白だった。片想いだと思っていたが、それは違った。天使と人間、複雑な関係だ。こんなことになるなら、下界に来るべきじゃなかったな、と俊は後悔した。

しばらくぼうつと座っていると、突然、勢いよく扉が開けられた。教室に入ってきたのは春樹だった。

春樹はすかずかと俊のもとへ歩み寄ると、俊の胸倉を取り、無理矢理立たせた。見るからに怒っている顔だ。どうし春樹が怒っているのかは察しがつく。

「なんで、桜庭をふったんだよ。桜庭のこと好きじゃなかったのか」
俊はそっぽを向きなにも答えなかった。

「おい！　なんとか言えよ！」

春樹は苛立ちを含んだ声で叫んだ。

「春樹には関係ないだろ」

俊はぶっきらぼうな口調で言った。瞬間、俊は後方に吹っ飛んでいた。春樹が俊の頬を殴ったのだ。俊はじんと痛む頬に手を当てた。唇が切れたようで、口の辺りがひりひりと痛んだ。

「なにすんだよ」

俊は春樹を睨んだ。

「ズルイよ。自分は片想いでいいからって……だからって、桜庭に告白されて桜庭をふるなんて、どうして……」

「どうしてって、俺はずっと片想いでいいから」

「答えになってない。俊は片想いでいいかもしれないけど、桜庭の気持ちは違うんだ」

俊は言葉に詰まった。確かに春樹の言う通りだ。桜庭にとって、天使の掟など全く関係のないことなのだから。

「桜庭、泣いてたぞ」

「……………」

「俊が告白しないなら、俺はそれでもいいと思っていた。だけど今

回は話が違つ」

春樹は拳を握ると、俊をきつと睨んだ。今にも飛び掛りそうな雰囲気だ。だが春樹はそうせずに、俊に背中を向けた。

「お前は自分の都合で桜庭を傷つけた。サイテーだな」

春樹の言葉が、ずしりと俊の胸に押し掛かった。親友から言われた、今までにない一番きつい言葉だった。

「知っていたんだな。桜庭が俺のこと好きだつてことを……」

「ああ、知っていた。前に桜庭本人から聞いた。それで、俺と千春が協力してあげたわけさ」

「やっぱり……それで桜庭に告白しろつてしつこく言ってきたわけだ」

「こんな結果になつて、協力した俺がバカだったよ。両想いだったと気づけば俊は桜庭に告白するか、桜庭の告白を受けるだろうと思つただけだな。だが結果的には、桜庭を傷つけることになつただけだ」

春樹の作つた握り拳はぶるぶると震えていた。きつと怒りからだろう。

「いつか話せよな。そこまで片想いに拘るには、なにか理由があるんだろう。俺たち親友なんだしさ」

わかつた、と俊は小さな声で春樹の背中に向かって言った。春樹は教室の扉を勢いよく開けると、学習室を出ていった。

なるほど、俊は自嘲した。片付けの途中二人が出ていったのは、俊と桜庭に気を遣つてのことだったのだ。そう考えると文化祭のとき、宣伝を兼ねたクッキー売りを俊と桜庭に任せたのも、藤崎の迷惑だったのだろうか。

その後、俊は一人で学習室の後片付けをしていたが、結局桜庭が戻ってくることはなかった。春樹や藤崎が来ることもなく、俊は一人で片付けを終わらせた。

「そんな暗い顔をしてどうしたんだい？」

居間でテレビを見ていた時子が、俊の顔色を読み取って訊いた。

「時子さん、俺どうしたらいいんだろう」

俊は自嘲した。つい先ほどのことを思い出すと、ぐっと胸の底から込み上げて来るものを感じた。

「なんか悩み事でもあるようだね。どれ、私に話してごらんよ」

俊は躊躇った。俊の悩み事は、天使の掟に反することだ。それを話せば、時子は怒るかもしれないと思った。

「心配せんでもええ。天使の掟に背くようなことでも、私はあんたの味方だよ」

「どうして掟に反することだとわかったんですか？」

「あんたの暗い顔を見りゃだいたいわかる。それに、天使が下界で悩むことと言ったら、掟に背くことしかないからね」

俊は苦笑した。すっかり見抜かれている。

小さくため息を一つつくと、桜庭に想いを寄せているということの時子に話した。時子は真剣な面持ちで、口を挟むことなく耳を傾けていた。

「なるほど。天使にとっては重大な問題だね。で、あんたはどうしたいわけだい？」

「どうしたいって？」

「麻由ちゃんのが好きなんだろ？ 麻由ちゃんと付き合いたいかどうかってことさ」

「そりゃ、できるならそうしたいですよ。でも掟があるし……」

はつきりしない俊に、時子のため息を漏らし、やれやれといった顔をした。

「一端の若い天使が、掟なんて気にするものじゃないよ。やりたいことがあれば、迷わず突き進めばいい。それが若者というものでは

ないのかい」

時子は仏壇に置かれている写真を手に取ると、懐かしむような顔で写真を見つめた。

「私の主人は二年前に亡くなった。けど、私は天使の掟を破って後悔したことは一度もないよ」

「掟を破ったって、本当なんですか？」

時子は頷いた。驚きだった。時子が、天使の掟を破って人間になったということを、俊は初めて聞いた。

「今でこそよぼよぼのババアになってしまったけど、私も若い頃はあんたみたいにいろいろ楽しんだものさ。主人に出会ったのも、ちようどあんたくらいの年頃だったかね。その頃から、私は天使の掟なんて忘れて主人と楽しんだものさ。そして彼と結婚して、私は天使の力を失った。生憎、天使と人間の関係で、子供を授かることはなかったけどね」

時子は写真を俊に渡した。白黒写真の中で、特攻服に身を包みメガネをかけた男が齒を覗かせ笑っていた。男は坊主頭で三十代くらいに見える。戦時中に撮られた写真のようだ。

「どうだい？ 私の主人かっこいいだろ」

「ええ、まあ……」

俊は曖昧に答えた。

「微妙、と言いたそうな顔だね」

心を読み取ったようにずばりと的確に突かれ、俊は苦笑した。今の時代から見ると、とてもかっこいいとは言えない。

「当時は今とファッションもヘアースタイルも流行が違ったからね。それでも彼は人気があったたほうなんだよ。私が下界に来たときは、ちようど戦時中だね。生活なんかは今よりだいぶ酷いものだった。食べ物ほろくになくて、みんな飢えに苦しんでいた。空襲警報が鳴る度に、震え上がっていたわね。それでも私は主人に出会って幸せだったわ」

俊は写真を時子に返した。時子の目には、少し涙が含まれている

ように思えたが、気のせいかもしれないと俊は思い直した。時子は、写真を丁寧な仏壇の元の場所へと戻した。

「確かに掟は大事だけど、恋愛も大切なことさ。恋愛は自由なんだから、あなたの好きなようにすればいい。例えば掟に背くことでもね。掟を破って、不幸になるというわけじゃないんだよ。少なくとも私は違ったから」

「俺、バカだよ。天使の掟が頭を過ぎって、桜庭を傷つけてしまった。ほんと、サイテーなやつだ」

呟くように言った俊の目からは涙が溢れ出していた。

俊が下界に来て初めて流した涙だった。視界がぼやけ、時子の顔が歪んで見えてきた。温かくて、止めようにも、次から次へと自然に溢れ出してくる。息が荒く、鼻水も出てくる。おまけに胸は締め付けられるように苦しい。

だが溜め込んでいた想いを吐き出せて、少し荷が下りたような気がした。下界で、やはり一番頼りになるのは時子だ。彼女は、俊が包み隠さず全て話せる唯一無二の存在だ。

「あなたが悪いわけじゃないよ。全部掟が悪いのさ。天使の掟は恋愛を束縛しているからね」

俊はブレザーの袖で涙を拭った。

自分の部屋に行くと、明かりも点けずにベッドに寝転がった。窓から差し込む月の光だけが、俊の部屋を照らしている。ゆっくりと窓のほうに首を捻った。窓際に置かれている、サザンクロスの植木が目飛び込んだ。

二年目のサザンクロスは、立派な淡いピンクの花弁をつけていた。俊が手入れを怠らなかった結果だ。サザンクロスは長雨、高温多湿、寒さを苦手とするため梅雨の時期や夏場、そして、冬は特に気をつけて育てた。また、花付きをよくするために、枝先の摘み取りも忘れずに行っていた。

更に、二年から三年に一度植え替えを行わなければならない。鉢の中が根でいっぱいになり、根詰まりを起こすと、生育に支障をき

たしてしまう可能性があるからだ。植え替えの時期は三月ごろで、
どうやらそれを行うのは来年になりそうだ。

「願いをかなえて……か」

俊はぼつりと花言葉を呟いた。

願いをかなえて　桜庭の願いは、自分と付き合うことだったの
だろう。それを叶えてやることはできなかった。いや、できなかった
のではなく、掟を盾に俊が逃げたのだ。楽園を捨てたくない、と
いう気持ちがまだ強かった。そのせいで、自分の気持ちに素直にな
れずにいる。

第2章 1

文化祭を終えてからというもの、俊と桜庭の間には、気まずい雰囲気の流れていた。お互いを敬遠しあったり、無視したりということはないのだが、今まで通り普通に接しているときも、遠慮というかどこかぎこちなさを感じていた。話をするときも二人が顔を合わせることはあまりない。時折目が合ってしまったら、必ずと言っていいほどどちらかが目を逸らす。そんなぎこちない日々が続いていた。

桜庭だけでなく、春樹とも微妙な関係だった。俊が桜庭の告白を断って、二人が何日か口を利かない日が続いた。しかし、そんな硬直状態も長くは続かなかった。

「俊が決めたことで、俺がむきになるのも変なことだよな」と春樹は笑いながら言った。二人の会話に、桜庭が話題に挙がったときのことだった。

俊は適当にうそを並べて、断った理由を話した。告白できない本当の理由は、天使の掟についてだが、それは伏せておいた。それなりのうそを並べて言ったおかげか、春樹は疑った様子は全く見せず、渋々ながらも納得した。

その後、俊と春樹の間に気まずい空気が流れることはなかった。そこはさすが親友といったところか。

それから数日後、春樹から、藤崎と付き合っているということを聞かされた。格別驚いたことではなかった。文化祭の頃から、そんな感じがしていたからだ。俊と桜庭のように、二人もよく休み時間や放課後を共にしていた。楽しそうに話で盛り上がっていたり、一緒に昼食を食べていたり、そんな光景を目にするたびに、俊はどこか孤独感を覚えてしまうときがあった。ただ友達として一緒にいることが多いのだろうか、と思ったときもあったが、それが違っていると確信したのは、文化祭の準備をしているときだった。

春樹と藤崎が揃って顔を出したとき、二人は冗談を交えながら楽しそうに話をしていた。そんな様子を、桜庭はことも楽しげに眺めていた。おそらく桜庭は二人が付き合っていることを知っていたのだろう。そのとき、俊は思ったのだ。二人は友達以上の関係がある、と。

二人が交際をスタートさせたのは、夏休みが明けてすぐのことだったようだ。俊が確信を得たときには、二人は既に付き合っていたことになる。春樹から告白したようだ。今まで俊に付き合っているということを明かさなかったのは、俊へ対しての気遣いだった。そのときから、春樹は俊が桜庭に想いを寄せていることを察していたらしく、自分たちが付き合っていることを明かしたら、俊にプレッシャーを感じさせるかもしれないということだった。

だが、俊が桜庭をふって隠す必要性もなくなった。春樹は包み隠さず全て俊に話したのだった。彼は親友への隠し事はできるだけ避けたいらしかった。

文化祭実行委員の仕事は、文化祭を終えた時期から特に目立った仕事はなくなった。クラスで出た意見や感想などをまとめ、生徒会に提出するくらいだった。それが文化祭実行委員として最後の仕事だった。

十一月になってすぐのときだった。俊が廊下を歩いていると、教室の中から春樹が声をかけてきた。俊は立ち止まり、春樹は足早に俊のところへとやって来た。

「どうした？」

「俊にはもう関係ないことなんだろうけど、一応言っておこうと思っ
つて」

「一応……俺には関係ないってどうして？」

「俊は桜庭をふった人間だからさ」

「なるほど。というと、桜庭に関わることなのか？」

「まあ、そうだな」

春樹は一旦口を閉じ、辺りを気にし首を左右に捻ると、改めて俊

のほうに顔を向けた。そして声のトーンを落として言った。

「瓜生がとうとうやった」

俊は以前春樹から聞いた話を思い出した。瓜生が桜庭に告白するかもしれないという話だ。

「それで、結果は？」

「さっき瓜生から聞いたんだけど、上手くいったってさ」

「そう……」

俊は何事もないような顔を装った。だが、心は締め付けられるように苦しかった。まだ桜場への想いを拭い去れずにいる証拠だ。

それは不安となつて胸に広がりつつあった。桜庭が誰かと付き合えば、それをきっかけに彼女のことを諦められるかもしれないと思つていたが、果たして本当に諦めることができるのだろうか。

「あのとき、桜庭の告白を断つた罰だな」

俊は苦笑するしかなかった。胸が苦しいのも、自分が招いた結果だ。

「そうだな。俺は陰ながら桜庭を応援するよ。桜庭が笑顔でいられるなら……それが俺の罪滅ぼしのような気がするし」

「なんで俊はいつもそうなんだ。なにかと自分のことは後回しにする。桜庭のことがまだ気になるなら、本当の想いを伝えればいいじゃないか。どうして素直にならないんだ」

春樹の声には少し苛立ちが含まれていた。素直になつてはいけななんだ、と俊は心の中で反論した。それはもはや、自らの気持ちを束縛するための呪文となっている。

「それが一番いいんだ。結局、失うものなんだから」

「どういうことだ」

春樹は眉間に皺を寄せ、少し不安な顔色を浮かべた。俊が沈んだ顔で言つたからかもしれない。

「まあ、いつか話すよ。それより、二人は上手くいつてるのか？」

「俺と千春のこと？」

俊はこくりと頷いた。

「ああ、上手くいつてる。今度の日曜も二人で出かける予定だし」
春樹は満面の笑みを浮かべた。

「なあ、やっぱり、さっきのこと話してくれよ。気になるからさ」
「また……」

今度な、と言おうとしたが、ふと藤崎の姿が飛び込んできて俊は口を噤んだ。彼女は左右で結った髪を揺らしながら、昼食のパンを三つとペットボトルを二つ抱え、二人のほうに歩み寄ってくるころだった。

「ほら、彼女のお見えだぞ」

俊は笑いながら、顎で春樹の後方を示した。春樹は振り返り藤崎の姿を確認すると、俊のほうに向き直った。

「二人だけのときに話すよ」

そうは言ったが、春樹に話すつもりはない。

「甲斐谷くんも一緒に昼食どう？」

「いや、俺はいいよ。これを職員室に届けないといけないし」

俊はどっさりと抱えた国語のノートに目を落とした。授業が終わってから、職員室まで持ってくるように国語の教師に頼まれていたのだ。

「お二人でごゆっくり」

俊は二人に背を向けると、歩き出した。

俊は歩きながら考えた。後一年余りで、楽園に帰らなければいけないということは、桜庭だけでなく春樹や藤崎とも別れなければならないということだ。それもまた覚悟しておかなければならない。

三年間で築き上げた友達との関係もそこで終わるのだ。楽園に戻ってしまえば、もう下界に来ることはないだろう。たとえ来ることになったとしても、何年先になるかわからない。

あまり期待してはいけない。深く下界の世界に踏み込んではいけない、と俊は自分に言い聞かせた。最後に後悔するのは自分だ。迷いが生じて、楽園に戻るのを躊躇ってしまうかもしれない。

それならば、いつそ天使などやめて時子のように人間として暮ら

そうかと思った。それはそれなかなか面白そうだ。

財布を取り出そうと、ズボンのポケットに手を伸ばしたところでその手を止めた。いつも財布に合鍵を入れているのだが、昨日その鍵を机に出したのだ。そして今日起きたのが、時間ギリギリだったため鍵を財布に入れるのを忘れたことを、学校で気付いたのを思い出した。

玄関のチャイムを鳴らした。しかし家の中で動きはなかった。もう一度押したが結果は同じだった。買い物でも行っているのだろうか、と思いながら俊は裏口に回った。

洗濯機の下に置いてある、小さな容器を取り出した。そこに裏口の鍵が入っている。俊は鍵を開け中に入った。台所はしんと静まり返っていた。

「時子さん？ いないの？」

反応はなかった。ぽたり、と水道官から滴り落ちる水滴に、内心びくりとした。緩んでいた蛇口をきゅっと閉めると、台所を抜け居間へ向かった。

居間からはテレビの音が漏れていた。どうやら時子は家にいるようだ。彼女は戸締りを疎かにして出かけるような人ではない。テレビをつけたままうっかり寝てしまったのだろうか。

居間の襖を開け、俊の目に飛び込んできたのは、ぐったりと横たわった時子の姿だった。顔は青白く生気を失っている。寝ている、といった表現は明らかに適切ではない。

「時子さん！」

俊は慌てて時子の身体を揺すった。だが、時子に反応は見られなかった。

「時子さん！ 起きてください！」

二度、三度と時子の身体を揺すったところで、時子は目を覚ました。焦点の合わない虚ろな目で、ぼんやりとどこかに視線を漂わせ

ている。

「……………」

「時子さん！　しっかりしてください！」

俊は時子の身体を小さく揺すりながら言った。時子のはっと我に返ったようで、俊の顔に焦点を合わせた。

「あら、私どうしてたのかしら？」

「倒れていたんですよ」

「倒れていた？」

時子はゆっくりと身体を起こした。それから時計に目を向けると、驚いた顔で言った。

「あら、もうこんな時間。お昼はもう過ぎちゃったのね」

「え、もうこんな時間って。いつから倒れていたのか覚えていないんですか？」

「さあ……覚えてないわね」

時子はちよつと首を傾げると眉間に皺を寄せた。

「今から夕食の支度をするわ」

そう言って、時子は立ち上がった。一瞬ふらりと体勢を崩したが、壁に手をつきなんとか堪えた。

「大丈夫ですか？」

俊は不安そうに訊いた。

「大丈夫よ。ちよつと目眩がしただけ」

曖昧に微笑むと時子は台所にいった。そんな時子の微笑みに俊は不安を覚えた。

俊はテレビニュースにチャンネルを合わせていた。キャスターが芸能情報やらスポーツ情報やらを機械的に淡々と喋っていた。それに合わせて映像が流れる。しばらく、テレビを見ていると襖の隙間からルーの香ばしい香りが漂ってきた。今夜はカレーのようだ。

下界の食べ物について楽園で研究を重ねてきたのだが、実際、下界の食べ物初めて口にしたとき、俊はあまりの美味しさに感動したことを思い出した。俊が初めて口にしたのは、赤飯だった。下界

に降り立った日、時子が夕食に用意してくれたのだ。

「美味しいですね」

一口食べて、俊はことも大げさに言った。楽園では味わったことのない食感と味わいがじわりと口の中で広がった。

「天使たちは人間の食べ物を知らないからね。私も初めて下界の食べ物を口にしたときは、感動したものだよ」

と時子は笑って言った。

それから様々な人間の食べ物を口にするたび、俊は驚かされることばかりだった。中には食べるのが勿体ないと思えるくらい立派な和菓子や洋食があった。それらは見栄えだけでなく、当然味も絶品だった。

俊は襖を開け台所を覗いた。先ほどの不安を打ち消すように時子が忙しなく動いていた。てきぱきとした動きからは、年齢とのギャップを感じさせるほどだった。

玄関のチャイムが鳴ったのはそれからしばらくしてのことだった。

「桜庭さんだと思うから、出てくれない」

時子が台所から言った。俊はわかりましたと返し、玄関の扉を開けた。桜庭さん、と聞いててつきり彼女かと思ったのだが、玄関に立っていたのは俊の知らない顔だった。

セーラー服の上に「桜庭植物店」というロゴの入ったエプロンを着た女が、植木を持って立っていた。長い髪を左右でみつあみに結っていて、頬にはそばかすがあった。女にしては、背も高いほうだった。

「桜庭植物店です。御注文のお花をお届けに参りました」

女は笑顔で言った。笑ったときに細くなる目は桜庭麻由とそっくりだった。

「ちょっと待ってください」

俊は居間へ戻ると、財布からお金を取り出し再び玄関に戻った。お金を彼女に渡し俊は植木を受け取った。植木は黄色や淡い紫色の花で彩られていた。初めて見る花だった。

「これなんていう花なの？」

「えっ」

女は、戸惑いの色を浮かべた。注文を間違ってしまったとも思ったのだろうか。聞いてから、客が注文した花でこのような質問をぶつけるのもおかしい話だ、と思った俊は、付け加えて言った。

「あ、ごめん。うちのおばあちゃんが注文したものだから、俺にはわからなくて」

女は納得したようで、なるほどといった顔で頷いた。

「ビオラです。綺麗なお花でしょ」

「ビオラか……」

俊は繰り返し花びらに目を落とした。可愛らしく綺麗な丸い花弁だった。

俊は女からの視線を感じ、顔を上げた。女は俊をまじまじと眺めていた。

「なんですか？」

「あの、失礼を承知の上で一つ訊きたいのですが、あなたが、お姉ちゃんをふった人ですか」

「お姉ちゃん？」

「桜庭麻由。あたしの姉です」

「それじゃ、君は桜庭の妹さん？」

女は、はいと言って大きく頷いた。だから桜庭麻由と重なるところがあるのだな、と合致した。

「お姉ちゃんが一目ぼれした人を一度見てみたいなと思って、あたしが配達に来たんです」

彼女はぺろりと舌を覗かせた。興味を持ったものに積極的になる性格は桜庭麻由にそっくりだ。

「でも、お姉ちゃんをふるって、あたしすごいビックリだったな。お姉ちゃん結構人気あるからさ、まさかふられるなんて思ってもみなかったんじゃないかな」

女は独り言を言うように淡々と喋った。それを聞いていた俊は苦

しくなりうつむいた。

「あ、すみません。誤解しないでくださいね。お姉ちゃんのことをふったからって、あなたのことを恨んでるわけではありませんから。ただ、ちょっととした興味本位で……すみません」

「いいよ、別に」

俊はうつむいたまま言った。女はぺこりと軽く頭を下げると、玄関を出ていった。

ビオラは時子に言われ、俊の部屋に置いておくことになった。サザンクロスに加え、新たな花が俊の部屋に加わった。

その後、俊は時子の寝室に行き本棚から植物図鑑を抜き取り開いた。研究者の性が、わからないものはつい調べたくなる。そうしないと納得がいかない。時子は植物が好きで、植物図鑑や植物栽培など、そういった類の本をいくつか持っている。ビオラの花言葉は『私のことを思つて』だった。

瓜生と桜庭が付き合っているという情報は、瞬く間に学校中に広がっていった。そして校内一の、美男子と美女のカップルとして有名になった。あながち間違いではなさそうだ。実際、瓜生は転校してきてすぐに、その美貌と並外れた運動神経に加え、頭脳明晰な彼は、一躍女子生徒の注目の的となった。

桜庭にしてもそうだ。彼女は必ず抜けて賢いというわけではないが、学力もそれなりに上位に位置する。それに俊のクラスでは断トツと言っているほど男子から人気があるのだから。天は二物を与えずという言葉があるが、二人は特別だなと思ってしまう。

そんな二人を羨む一方で、嫉妬を抱く者も何人かいた。そういった人たちの無表情で二人に向けられる視線は冷たかった。当然、桜庭や瓜生はそれを快く思っていなかった。

「桜庭楽しそうだな」

俊は友達と楽しそうに談笑している桜庭を見ながら言った。彼女の会話から自然と耳に入ってくるのは、瓜生との関係についてのことだった。

「おいおい、そんな寂しそうな顔で言うなよな。俊が選んだことだろう」

春樹は半ば呆れた顔で、ため息混じりに言った。そう言われると、俊はなにも反論することができない。

「瓜生と付き合ってたもんな。もともと桜庭自身人気があったし、瓜生と付き合っていれば当然か」

春樹はうんうんと肯定した。

「俺と千春なんかとは格が違うな」

「ちよつと、それどういう意味よ」

藤崎は、春樹の脇腹を小突いた。

「俺たちじゃ、あの二人のようにはなれないってこと」

「注目されるような人気者にはなれないってことかな？」

「まあ、そうだな。実際、桜庭たちみたいに注目されたことないだろ」

「確かに……」

藤崎は腕を組むと、首を縦に振った。

「でも、それはみんなが、私たちが付き合っているってことを知らないからじゃない」

春樹と藤崎が付き合っていることを知っているのは、春樹の親友である俊と、藤崎の親友である桜庭だけだ。俊は春樹から、誰にも言うなよ、と口止めされていたので公にはしていない。

「知ったところで変わらないさ。俺たちはどこにでもいるような、普通のカップルなんだし。桜庭や瓜生のように、飛び抜けてなにかを持っているってわけじゃないんだから」

「あの二人は特別だよ。麻由はクラスから人気もあって可愛いし、瓜生くんはカッコいいし」

「俺はカッコよくないのか」

すかさず春樹が言った。

「まあ、それなりに。でも瓜生くんには劣るわね」

むすっとした顔の春樹をよそに、俊と藤崎はくすくすと笑った。

「注目されなくても、藤崎は可愛いと思うよ。桜庭に負けず劣らずね」

俊が言うと、藤崎は照れたように頬を少し赤く染めた。

「おいおい、今度は千春を狙うつもりか」

春樹は笑いながら、からかうような口調だった。

「そんなことはない。春樹が藤崎と別れない限りね」

「甲斐谷くんは、麻由の告白を断って後悔してないの？」

「それは……まあ……」

俊は引きつった笑顔を浮かべ、曖昧に答えた。触れられたくないことだった。もちろん、後悔しているが、天使の運命なのだから仕方ないことだ。

「もう後悔したって遅いことだ。桜庭と瓜生が上手くいつてるのなら、それでいい。……それでいいんだ」

俊は自分に言い聞かせるように言った。だが心の中に、桜庭を諦めきれない気持ちがあるのもまた事実だ。俊が桜庭をふったことで、両思いから本当に片想いになってしまったようだ。

「そうだ、いいこと思いついた」

唐突に、藤崎は胸の前でぱんと手を叩いた。俊と春樹は同時に、藤崎のほうに顔を向けていた。藤崎の少しつりあがった目は細く、なにかを企んでいるような笑みを浮かべていた。

「いいことつてなに？」

春樹が訊いた。

「さっき、私たちは注目されるような存在にはなれないって言ったよね。だったら、注目されるようなカップルになってやろうじゃない」

「注目されなくたっていいじゃん」

春樹はやれやれといった顔でため息をついた。

「だって悔しいんだもん」

「注目されるようにって、どうやるの？」

俊が訊いた。

「まあ、見てなさいよ。私たちが飛び抜けたものを持ち合わせていないなら、ちょっと大胆になればいいのよ」

にやりと笑みを浮かべた藤崎は、黒板のほうに顔を向けた。大きく息を吸い込み深呼吸を一つすると、

「はい、みんな注目」

と、透き通った声で教室全体に響き渡る声で言った。同時に教室内は静まり返り、ほぼ全員が藤崎のほうに振り返った。

「おい、なにをするつもりだよ？」

さすがに気になったのか、春樹は少し焦った様子で訊いた。藤崎は笑みを浮かべたままでなにも答えなかった。

藤崎は春樹のほうに向き直った。そして春樹の頬を掌で挟むと、

顔を近づけキスした。といっても、ほんの一瞬唇を重ねただけだった。

途端に教室内は騒がしくなった。ばかんと口を開けて、呆気にとられている者がいれば、煽てるようにはしゃいでいる者がいる。当の春樹は目を伏せ身体を硬直させていた。更に頬と耳を真っ赤に染めていた。藤崎も同じように赤く染まっていた。

「どう？ これでちょっとは注目される存在になれたんじゃない？」

藤崎は春樹に向かってにつこりと微笑みかけた。春樹は引きつった顔で笑った。

そのとき、俊は春樹の小指と藤崎の小指で結ばれている赤い糸を見た。それは、天使が見ることのできる運命の赤い糸だ。将来のパートナーに向かって伸びる運命の赤い糸。お互いが遠すぎると見えないが、二人の距離が近いと見えるのだ。

この糸は、下界でも「運命の赤い糸」として、広まっているようだ。無論、人間には見ることが出来ないのだが、どうやら伝説のようなものとして広まっている。

俊は楽園での研究によってその発祥地が宋という時代の、「中国」という国が元だということを突き止めていた。当時、東南アジアを中心に、各国の研究を行っていたとき、見つけた研究結果だ。

研究結果と同時に、なぜ下界で運命の赤い糸が広まったのかという、疑問が浮かび上がってきた。天使が介入しない限り、そのようなことが広がるなど考えにくい。俊は研究を重ねていき、それも間もなく解けた。

下界にその伝説が広がる数十年前、楽園から一人の天使が下界に降り立った。アリエルという女性の天使だ。彼女は、老婆の姿を模して下界へ降り立った。その国が宋と呼ばれる国だったのだ。

彼女は下界で、一人の男に想いを寄せる女と出会った。老婆は次第にその女と親しくなっていき、女が男に想いを寄せているということを知った。だが、その男と女は赤い運命の糸で結ばれていなかった。彼女の運命の人は、その男とは別の人だったのだ。

女が男に告白しようかどうか悩んでいたとき、老婆は運命の赤い糸で結ばれた人は別の人だ、と女に告げた。結局女は告白せず、いつの間にか、別の男と結婚していたのだった。

老婆は天使の掟を破ってしまい、墮天使にされることになってしまった。そして人間となつてその時代を過ごしたのだが、それも長く続かなかった。老婆の姿をしていたため、間もなく寿命で死んでしまったのだ。

それ以後、赤い運命の糸は、将来のパートナーに向かつて伸びる糸として、伝説として広まっていた。「日本」でその糸が、小指と小指で結ばれるという理由にも由来があることを俊は突き止めていた。「日本」では約束を交わすとき、小指同士を絡ませることがある。約束の指という意味の小指が、将来のパートナーとの契りと由来しているのだ。

そして天使はこの運命の赤い糸を修復する力を備えている。一方で糸を断ち切ってしまう存在が、悪魔や墮天使といった存在なのだ。この二つの存在は天使と対立する関係にある。

「あれは、不意打ちだろ」

重そうにとっさりとノートを抱えた春樹が言った。彼の顔はまだかすかに赤く、火照っているようだ。俊と春樹はその後、高根に職員室に呼び出されたのだ。

「俺もビックリしたよ。まさか、藤崎があんな大胆なことするとはね」

「ほんと、有り得ねえっつーの」

「でも、藤崎の言つたように、ちよつとは注目されそうだな」

俊が笑いながら言う、春樹はまあな、といって頷いた。その顔はどこか誇らしく、満更嫌ではなさそうだ。

「俺のファーストキスが不意打ちになるとはね」

春樹はぼつりと呟くように言つた。

突然、春樹が足を止め、俊も思わず立ち止まった。どうしたんだ、と声をかけようとしたが、俊はすぐにその理由を察知した。瓜生と桜庭が、並んで二人のほうに向かって歩いて来ていた。桜庭は俊たちに気づいていないようで、瓜生のほうに顔を向け楽しそうに笑っている。だがそのすぐ後には、二人の姿を認め笑顔を消した。俊は瓜生と初めて出合ったときに感じた、奇妙な感覚を再び覚えた。

瓜生と桜庭の間に運命の赤い糸を見ることができなかった。どうやら、瓜生と桜庭は将来を共にするというわけではなさそうだ。

「千春とのファーストキスはもうだった」

桜庭がにやにやとした顔つきで、からかうような口調で言った。

春樹は答えず、ぷいっとそっぽを向いた。

「藤崎とキスしたんだ。二人は付き合っていたわけか」

瓜生はそれに興味を示した。

彼は俊たちの隣のクラスで、春樹と藤崎がキスをした状況を知らない。桜庭は瓜生に先ほどの状況を説明した。それを聞いた瓜生は、くすくすと笑い出した。

「わ、笑うなよ」

春樹は瓜生の顔を見て言った。瓜生は笑いを止めようとしなない。

「二人のほうは上手くいってるのか？」

春樹が訊いた。俊には一瞬桜庭の顔が曇ったように映った。多分、気のせいだろう。

「上手くいってるよ。キスはただけど」

瓜生は桜庭の肩に手を回し、ぐつと彼女を引き寄せた。桜庭は驚いた顔で、瓜生の顔を見た。桜庭の身長は俊と同じくらいだが、瓜生はそれよりも高かった。

「それなら、二人もキスしたらどうだ？ もっと注目を浴びるぞ」
不適に笑みを浮かべた春樹が、からかうように言った。

「からかわないでよ」

間髪を容れず、桜庭が言う。

「彼女がいったんなら、俺は別にいいけど」

瓜生は微笑を浮かべ、桜庭の顔をまじまじと見つめた。桜庭は顔を赤らめ、目を伏せた。

「ごめんなさい。あたし……まだできない」

瓜生は小さく頷き、わかったと言った。

「君が、甲斐谷くんだよな？」

「えっ、そうだけど」

三人の話に耳を傾けていただけの俊は、瓜生に突然話しかけられ驚いた。このまま三人だけの話で終わっていくものばかりだと思っていたのだ。

瓜生は舐めるように、俊の身体を観察した。獲物を捕らえるかのような瓜生の鋭い視線に、俊は悪寒を覚えた。瞬間、俊は人間とは別のようなものを瓜生から感じ取った。そこには、どこか懐かしさのようなものも含まれていた。

「前に一度会ったこと覚えてる？」

俊は首を縦に振った。忘れもしない、奇妙な印象の残る出会いだった。

「嬉しいな。覚えていてくれたか。俺を見て、なにか感じることはない？」

心を見透かしているかのような質問に、俊はどきりとした。

「いや、別にないけど……」

俊はうそをついた。瓜生に危険な香りを感じ、直感的に判断したのだ。

「そうか。じゃあ、また部活でな」

最後の言葉は、春樹に言ったようだ。瓜生と桜庭は二人の横を抜けていくと、教室へと入っていった。

俊が校舎を出る頃には、晴れ渡った空はすっかり茜色に染まっていた。十一月にもなれば、陽が落ちるのもだいぶと早い。下界に来てそういった変化を実際に楽しむのも、この地に降り立った特権だ

なと思った。

楽園には四季折々、日の出や、日の入りといった変化はない。時間の経過も気にすることなく、生活を送ってきたが、下界に降り立って、そういった変化に敏感になったのは確かだ。

俊が校門に向かっていてるときだった。壁にもたれた姿勢で立っている、ジャージ姿の瓜生が目に入った。校門を抜けていく女子生徒たちは、瓜生に一声かけていく。瓜生はそれに笑顔で応じていた。

「クラブはどうしたんだ？」

俊のほうから話しかけた。

「すぐ行く。君と話がしたくてね、ここで待っていたのさ」

「話？ 昼休みに言わなかったってことは、二人だけということか」

「ああ。桜庭から聞いたけど、君は彼女をふったらしいね」

「それがどうした？」

俊の語気は思わず強くなってしまった。瓜生に言われると、なぜか腹立たしかった。

「それは、君が天使だから桜庭をふったのか？」

「え……な、なに言ってるんだ」

明らかに狼狽しているのが自分でもわかった。人間に慣れてきたとはいえ、ずばり言い当てられるとうそを隠すのがまだ苦手だ。

「隠しても無駄だ。俺は全て知っている」

俊は眉間に皺を寄せ考え込んだ。天使の力を使ってしまったことも、自分が天使だということもまだ誰にも話していない。それなのに、どうして瓜生は知っているのか？ 考えられる答えは一つしかなかった。

俊が口を開く前に、表情を読み取ってか瓜生が言った。

「どうしてだ、と言いたそうな顔をしているな。一年半前に下界に降り立った天使って、ファニエルだろ。いや、今は甲斐谷俊と呼んだほうがいいのかな」

「お前も、天使なのか……」

「そうだ。下界には、二月に来た」

その月は、瓜生が木碕高校に転校してきたときだ。不意に春樹の言葉を思い出した。

瓜生は謎多き人物。それは、彼が天使だからだろう。過去の経歴を隠したのは、恐らく俊と同じ理由なのだろう。

「それじゃ、お前は天使だというのに桜庭に告白したのか？」

「そうだ」

悪びれた様子もなく瓜生は答えた。

「天使の掟を知っていながら、それを破ったってことか」

「君はそんなものに拘っているのか。君だって、こっちに来て掟の一つや二つは破っているだろう」

俊は言い返すことができなかった。事実、彼の言ったように、掟を破っている。

「なにも言い返さないということは、凶星のようだな」

「だけど……」

俊は閉口した。言おうかどうか躊躇った。

「だけど人間に恋することは、いけないことだと言いたいのか？」

俊は頷いた。自分の心を読み取っているかのような瓜生の発言に、俊は毎回驚かされていた。天使とはいえ、彼は俊以上に人の心理を読み解くことに長けているようだ。いや、俊があまりにも劣っているのか、表情が顔に出過ぎていただけなのかもしれない。

「自惚れるなよ。掟を破るということは、どんな掟でも変わらないんだ。君は桜庭が好きだったんだろ。しかし、掟を破ってしまうことを恐れたんじゃないのか。だから好きな人をふってまで、天使であり続けようとした。だが、この世界で天使の力を使ってしまうば、それだけで掟破りなんだ」

瓜生の言葉一つ一つが、俊の胸にナイフとなつて突き刺さった。またもや的確なことを突かれ俊の胸は痛んだ。確かに彼の言うように、掟を破ることに大小は関係ない。それに自分は桜庭から、逃げ出してしまった身分なのだ。時子が言っていたように、瓜生も恋愛

は自由だという考えなのだろうか。だから、掟を破ってまで桜庭に告白したというのか？

「それに、俺が掟を破ったところでどうこうってわけじゃないしな」「どうということだ？」

瓜生の意味深長な言葉に、俊は訊いた。

「それは秘密だ」

「おい、早くこいよ。練習始まるぞ」

ジャージ姿の春樹が、遠くから瓜生を呼んだ。瓜生は春樹のほうに首を捻ると頷いた。

「安心しろ。君が天使だということは誰にも言わない。まあ、言ったところで誰も信じないだろうけど」

瓜生は春樹のほうに歩み出した。しかし数歩進んだところで、俊のほうに振り返った。

「一つ言い忘れていたよ。楽園での俺の名前はベリアルだ。じゃあな、かつての親友ファニエル」

瓜生は春樹のほうへと駆け出した。二人は並んで部室のほうへと歩いていった。

瓜生の楽園での名前を聞き、俊は呆気にとられていた。忘れもしない、懐かしい名前だった。

ミカエルが楽園を治める以前、熾天使の地位にあった、大天使ルシファーが楽園を治めていた。彼は、現楽園の長であるミカエルの双子の兄だった。天使の中でも特別な十二枚の翼を持っており、その翼はミカエル同様に、眩いほどの純白だった。神に最も近い存在の天使で、楽園の誰もが尊敬してやまない存在だった。

そのころから、ファニエルは第六天国で下界について研究を行っていた。当時ファニエルが研究を行っていた国は「宋」と呼ばれる国だった。ほかに六人の優秀な天使たちが、第六天国の研究所で下界についての研究を行っていた。その研究者の一人に力天使のベリアルはいた。

ベリアルは人間の心理について研究を行っていた。金色の長髪に、二枚の純白の翼。端正な顔立ちは美しく、研究熱心な天使だった。そんな彼に、ファニエルは憧れののようなものを抱いていた。

ファニエルはもともと彼ほど研究熱心な天使ではなかった。研究が思うように進まなかったとき、何度か投げ出そうかと考えたことがあった。だがファニエルとは対照的に、ベリアルは事態に窮すればするほど、より熱を入れて研究する。そんな彼を見ると、自分がとんでもなく情けなく思えてくるのだ。

ベリアルが研究熱心なのにはある理由があった。それは下界への憧れだ。彼にはいつか下界に降り立ってみたいという願望があった。過去には、楽園から下界に降り立っている天使たちが何人かいる。

研究熱心な彼は、人間の心理行動におけるパターンをいくつも見出していった。だが、彼の研究は完璧と言える答えは出てこなかった。彼の出した結論に反する行動を行う人間が何人かいたのだ。それは、彼を悩ませる材料となった。

ベリアルはめげずに研究に没頭した。しかし、人間の心理的行動パターンを見出せば、必ずと言っていいほど例外が伴っていた。そ

の度、彼は頭を抱えていた。彼は、人間の心理を研究していく最中で、いつの間にか下界の法律についても精通するようになっていた。ファニエルは自分の研究以外に、ベリアルの研究も手伝っていた。人間の心理を理解することによって、自分の研究がより密度の濃いものになると思っていたからだ。

だが彼の研究を手伝い始めて間もなく、人間の例外的な行動に頭を悩ませる羽目になってしまった。人間は、ベリアルの出した理論的な結論をことごとく打ち破っていった。

結局、二人でいくら考えても答えを得ることはできなかった。それはベリアルにとつて屈辱的なものだったようだ。

「第一天国に行かないか？」

ある日、自分の研究に没頭していると、ベリアルが唐突に言った。ベリアルが研究室を抜けて、他天国に行こうと提案してきたことに、ファニエルは驚いた。彼は研究室をほとんど出たことがないのだ。

「いきなりどうして？」

「第一天国つて下界にかなり近い天国だろ。そこに行けば、人間の心理がちよつとはわかるかもしれないと思つてさ」

なるほど、とファニエルは納得した。研究室に籠っているより、下界に近い世界に足を運べばヒントを得られるかもしれないと思つたのだらう。

「わかった。行ってみるか」

ファニエルとベリアルは研究室を出ると、第一天国へと飛んだ。第一天国に足を踏み入れるのは初めてだった。緑の山々が連なり、小川が流れている。天使たちはいくつもの小さな集団や大きな集団を作り暮らしている。青々とした木々には木の実が熟れており、青く晴れ渡った空には雲ひとつない。研究室で見る下界そのものの世界がそこにはあった。

しかし、下界に存在する季節の変化というものが楽園には存在しない。風を感じることもなければ、天候の変化もないのだ。第一天国は下界の姿を模していても、なに一つ変化のない国でもあった。

「ここが第一天国か」

ベリアルは目を輝かせ、第一天国を見渡した。

「やっぱり、まだ下界に行ってみたいと思ってるのか？」

ファニエルは訊いてみた。

「ああ、もちろん。人間の食べ物を食べてみたい。雪をみたい。風を感じたい。人間と接してみた。やりたいことはいっぱいある」

ベリアルは両手を大きく広げた。彼の目は夢見る子供のように、きらきらと輝いていた。

「お前は行ってみたくないのか？」

「特に行きたいとは思わないな」

ベリアルは小高い丘まで飛ぶと、そこに立つ大きな樹木に近づき赤い木の実を二つむしり取った。ファニエルが後を追って丘に立つと、木の実の一つをファニエルに投げて寄越した。二人はその木の幹にもたれる姿勢で座った。

「お前もこの食べ物を知っているだろ。日本では、りんごと呼ばれている食べ物だ。国によって呼び名は違うが、この食べ物に変わりはない。本来、楽園にしか存在しない食べ物が、どうして下界に広まったか知ってるか？」

ベリアルは木の実を一口かじって口に含んだ。

「天使が持ち込んだからだろ」

「そう、下界に下りた天使がこの木の実の種をまいたんだ。木の実は成長していき、赤い実を結んだ。そして人間の食べ物として広まっていた。だが、楽園と下界では決定的な違いがあった」

「決定的な違い？」

「変化だ。下界は変化があるから、同じ食べ物でも味に違いが出てくるし、木の実の育ちにも変化が生じる。ここでは一定の味しか味わえないが、下界だと様々な味を感じることができるんだ」

ファニエルは木の実を口に運んだ。木の実の甘酸っぱさが口の中でじわりと広がった。

「でも変化があるから、人間は争う。醜い生き物だ」

ベリアルはため息をついた。若干、呆れた顔をしている。

「その争いが人を進化させているんだよ。下界はこれから、もっと発展していくだろう。争いは人の知恵を活性化させ、人間は様々なものを生み出していく。それは武器であったり、薬であったり様々だ。彼らは天使と違い、頭を使って地位を確立させていつてるんだよ。恒久平和と謳われる楽園より、変化のある世界のほうが楽しいと思わないか」

ファニエルは首を捻り唸った。そして答えを出す代わりに、ベリアルに質問をぶつけてみた。

「楽園が不満なのか？」

ベリアルは躊躇いなく頷いた。

楽園や地獄では、天使と悪魔の戦いはあるものの、下界のように戦争といったような大きな戦いが起こったことがない。そんなことを企もうものなら、神の怒りを買ってしまいどうなってしまうかわからない。

「でも俺たちの階級じゃ、下界に派遣されるのは無理だろうな」

「そうなんだよな。下界に行くのは下位階級の役目だもん」

ベリアルはがっくりと肩を落とした。

「ルシファア様にとってみたらどうだ。下界に降りる許可を与えてくれるかもしれないぜ」

「そうだな。もっと研究が進んだら話してみるよ」

「研究熱心だな」

ファニエルは親友の顔を見て笑った。

「与えられた仕事をこなしているだけだ。当然のことをしているまです」

ベリアルは立ち上がった。

「研究所に戻るか」

「もういいのか？」

「ああ、やっぱり下界に降り立たなければ答えは見つからなさそうだ。恐らく、人と接してこそ答えは見出せるものだと思う。ここは

時間の止まった世界。下界に似てはいるが、やっぱり違う」

ファニエルは頷いた。答えを見つけるには、人間の心理というものに直接触れる必要がありそうだ。天使と人間では根本的に違う。

その後も、二人は下界について研究を重ねていった。下界はベリアルと言ったようにどんどん発展していった。争いが争いを引き起こし、人は知恵をつけていった。国と国の支配関係は目まぐるしく変化していった。人間たちは着実に進化していったのだ。

ファニエルは下界の凄まじい発展に手を焼いていた。自分の研究のほうを追いつかず、ベリアルの研究を手伝うことはほとんどできなくなった。彼も彼で自分の研究に没頭し、ファニエルの手伝いをするのがなくなった。

二人の研究は忙しくなる一方で、楽園にも不穏な空気が広がり始めていた。天使たちの間で、ルシファーがなにかを企んでいるという噂が広がっていた。ファニエルは研究に追われていて、根も葉もない噂は気にも留めていなかった。

天使たちの噂は的中していた。熾天使ルシファーは、自分に従う天使たちを集めて神に反旗を翻したのだ。恒久平和な楽園に起きた過去最悪の事件だ。天使たちは混乱し、ファニエルやベリアルも研究どころではなくなった。

ルシファーが神に反旗を翻したのは、神に対する傲慢だった。彼は、自分こそ神にふさわしいのではないかと思い、自分に従う天使たちを集め神に立ち向かおうと考えたのだ。それに自分たち天使より低い人間が、神から寵愛を受けているのに不満や怒りを持っていたという伝えもあった。

楽園はルシファーに対抗すべく、ミカエル率いる天使たちがルシファーに立ち向かった。結果は、ミカエル率いる天使軍の勝利だった。ミカエルは天使の中でも特に戦いに優れていたようだ。事実、過去に彼はジャンヌ・ダルクという人間に戦いの助言をして、その軍を勝利に導いた。それは伝説となって下界でも語り継がれている。こうして、ルシファーと彼に従っていた天使たちは楽園を追放さ

れ、新たに樂園の頂点に立ったのがミカエルだった。彼は見事な功績を収め、大天使という階級ながら天使たちから崇められる存在となった。

ミカエルが樂園を治めるようになって、天使たちの配属も変わった。全て彼の指示によるものだ。ファニエルは第六天国でそのまま研究を続けることになったが、ベリアルは第一天国の管理職に任命された。だが彼はそれを快く受け入れず、ミカエルに直談判しに行った。結果は変わらなかった。ベリアルは洪々第六天国の研究所を離れ、第一天国の管理職に当たったのだ。

ファニエルの研究はベリアルの後を引き継ぎ、人間の心理と「日本」という国の研究を任されることになった。ベリアルが残した研究結果に加え、ファニエルはいくつもの心理的行動パターンを見出していったが、その度に壁にぶち当たってしまっていた。心理的行動においては結果を出せないままで、下界の急激な発展とともに、研究者は増員されることになった。

特に高度経済成長期に突入した日本の発展は著しいものだった。ファニエルが研究を行っていて、一番大変な時期であった。目まぐるしい社会の変化と、人間の欲望が入り乱れた街は例を見ない賑やかさだった。だが、それも間もなくして終焉を迎えた。波に乗ったものは、いずれ廃れていくものだ。海に満潮と干潮があるように、人間社会においても、好景気と不景気という波があるのだ。

ファニエルとベリアルは職が変わって以来会うことはなくなった。

頬杖をつき、ちらちらと降る雪を見ながら、一年が経つのは早いものだなと感じていた。俊にとつて二度目の冬が訪れていた。今年は雪が降り始めるのが早かった。昨年は暖冬の影響もあってか、例年よりも雪が降るのが遅かった。しかし今年は、例年以上に一段と厳しい冬のようだ。十二月に入って、もう四回も雪が降っている。朝から降り出していた雪は、グラウンドを真っ白に染めていた。

「なにぼうつとしてんだ？」

「え……」

俊は頬杖を止め、前の席に座った春樹に視点を変えた。

「なにか考え事でもしてたのか？」

「いや、別に……」

瓜生がかつての親友だと知って、俊は彼について考え込むことが多くなっていた。

瓜生はなんの目的があつて下界に来たのだろうか。同じ国に、樂園から天使を二人も派遣した、ということは考えにくい。過去にそういった事例がないのだ。それに彼が言った、『俺が掟を破ったところでどうこうじゃないしな』という言葉が頭に張り付いている。意味ありげで、なにか裏がありそうでならない。

「クリスマスはやっぱり、藤崎と一緒に過ごすんだよな」

俊は瓜生のことを頭から振り払うため、春樹に話題を振った。

「うん。イブは千春の誕生日だし、クリスマスを兼ねて、誕生日を祝ってあげようと思うんだ。誕生日プレゼントなにがいいだろう？」

「なんでもいいんじゃない。物より気持ちが一番大切だよ」

「そうだな。クリスマスパーティー、お前も来るか？」

俊は首を横に振った。

「俺がいても邪魔者になるだけだしな。それに……」

俊はにやりと微笑んで、

「初体験も計画してんだろ」

と声のトーンを落として言った。途端に春樹の顔は赤くなった。どうやら図星のようだ。

「ま、まあ、そのつもり……かな」

「頑張りたまえ、若者よ」

俊は春樹の肩をぽんぽんと叩いて笑った。春樹はなにかに言い返したそうな顔をしたが、口を開くことはなかった。

俊が帰る頃には、雪は霽に変わっていた。どんよりとした雲を見ると、まだ晴れてきそうではなさそうだ。

教室に戻ろうかと、ふと考えた。傘を忘れたわけではないのだが、傘立てに挿しておいた俊の傘は誰かが持っていたようだ。間違えて持っていたのではなく、おそらく故意的なものだろう。

俊が引き返そうとしたとき、下駄箱でスニーカーに履き替えている桜庭と瓜生の姿が目に入った。俊は目を逸らし二人とは別のほうに歩き出したが、見つかったらしく瓜生に呼び止められた。そのまま去るわけにも行かず、仕方なく立ち止まった。

「ベリアル……」

思わず楽園での名前が口をついて出た。しまったと思ったが、瓜生は

「ベリアル？」

と首を傾げ、知らぬ振りをしてとぼけた。

「なんでもない。それより二人とも部活は？」

「あたしも瓜生くんも今日はないよ」

桜庭が答える。

俊はまじまじと瓜生の顔を見た。人間だからか、彼にあの頃の面影はすっかり感じられなかった。本当にベリアルなのだろうか少し疑ってしまう。

「春樹と帰らないのか？」

瓜生は口許を意地悪そうに曲げて訊いてきた。事を知っているだけに、俊は少しむっとした。

「春樹は藤崎と帰るって……」

「あー、そう言えば二人付き合ってたもんな」

わざとらしく言う瓜生を、殴ってやりたいという衝動に駆られた。挑発的な物言いだった。かつての親友が言う言葉だとはとても思いたくなかった。

「あれっ、甲斐谷くん傘は？」

「忘れた」

思わずぶっきらぼうな口調で、明らかにわかるようなうそをついた。

「じゃあ、あたしの傘貸してあげるよ。ちょっとぼろいけど、ごめんね」

「桜庭はどうするの？」

「瓜生くんの傘に入れてもらうから大丈夫」

桜庭は瓜生に笑いかけると、

「帰ろう」

と言って、彼の手を引っ張った。

瓜生の差す傘に、桜庭は彼と腕を組み歩調を合わせ歩く。二人は笑いながら、楽しそうに校門へと向かっていった。俊は二人の背中を見ているのが辛くなり、目を伏せた。

胸が苦しい。後悔が込み上げてくる。自分の気持ちに正直になれないのが辛い。いや、正直になるというより、天使の掟という呪縛に怖気づいているだけで、結局、逃げている。真正面から向き合わなければならぬのは俊のほうだ。でも、まだ　やはり決心がでない。

理想のカップルだなと思ったが、納得はいかなかった。瓜生が天使でなければ、本当に理想のカップルなのだろう。それなら、運命の赤い糸も見えたかもしれない。その糸が見えれば俊としても、きっぱりと諦めざるを得ない。彼女の運命の人は誰なのだろうと、そんな疑問がふと頭を過ぎった。

俊は桜庭から借りた黄色い傘を差した。確かにぼろかった。ビニ

ールは少し破れていて、僅かだが水が漏ってくる。柄のところに「桜庭祐里」と油性マジックで書かれていた。一瞬、誰だろうと考えたが、すぐにある人物が過ぎった。

時子が倒れて以来、俊は常に合鍵を手放さないように気をつけている。チャイムは鳴らさず、合鍵で鍵を開け家に入った。

居間はまるで別次元だった。俊の冷えた身体を、暖房の効いた部屋がさつと温めていった。時子は老眼鏡をかけながら、一心不乱に一枚の紙に、筆を走らせていた。いつにもなく真剣な表情だった。

「なに書いてるんですか？」

俊は尋ねてみた。火燵に足を突っ込むと、足許が瞬時に温まった。

「手紙」

「誰にですか？」

「そうね……」

と言つて、時子は手を休め、わざとらしく考え込むような素振りを見せた。

「私の愛しい人かしら」

「愛しい人？ 亡くなったご主人に宛てた手紙ですか？」

ふふふと、時子は意味ありげに微笑んだ。

「違うわ。亡くなった人に宛てた手紙なんて意味ないわよ」

「じゃあ、誰に……」

「秘密」

時子は再び筆を走らせ始めた。少し身体を乗り出せば、覗き見ることはできるが、そこまでして知りたいとは思わなかった。時子は黙々と筆を走らせ続けた。

手紙を書く彼女の姿を見ていて、俊の頭にふと疑問が過ぎった。

「そう言えば、前から気になっていたことがあるんですけど……」

「なんだい？」

時子は再び手を止め、俊のほうに顔を向けた。

「ミカエル様から俺が居候するって伝書が来たとき、どうして断らなかったんですか？」

俊がこの家に居候することになったときから気になっていたことを思い出したのだ。昔は天使でも、今は人間として暮らしているのだから、ミカエルの頼みを断っても問題ないはずだ。むしろ、樂園を捨てた天使にとつて、今更、天使が干渉してくることは煩わしいものではないのだろうか。

「それが罪滅ぼしになればと思つてね。私は天使を、樂園を裏切つた存在だから」

「罪滅ぼしですか？」

「掟を破り樂園を飛び出して、自分勝手に、のうのうと人間として暮らしているのよ。そりゃ、樂園とはできる限り関わりたくないけど、それはそれであまりにも都合よすぎるからね」

「それで今回の件を引き受けて下さったのですね」

「そうよ。ミカエル様はビックリなさっているでしょうね。まさか引き受けるとは思つてなかったんじゃないかしら」

時子はくすりと微笑んだ。

俊にはもう一つ気になっていることがあつた。ミカエルはどうして時子に伝書を出したのかということだ。なにか理由があつてのことなのだろう。聞こうかどうか迷つたが、結局聞かないでおくことにした。いずれ時子自身が話してくれるかもしれない。

翌日、クリスマスの日に、ポインセチアの花を時子に贈ろうと思つた俊は桜庭植物店に向かった。昨日借りた傘も返すつもりだ。昨夜の雪が激しかったため、路面にはまだ薄っすらと雪が残っており所々凍結していた。

ポインセチアは時子の最も好きな花だ。昨年にも時子にポインセチアの花を贈つた。そのとき、彼女は目を輝かせ子供のように喜んだのを覚えている。

桜庭植物店では、あの子の少女がせつせと働いていた。
「いらつしゃいませ。お久しぶりですね」

俊が店に近づくと、少女は笑顔で応対した。

「忙しそうだね、祐里ちゃん」

少女は目を見開き、うそを衝かれたような顔をした。

「どうしてあたしの名前を知ってるんですか？ 前に言いました？」

「昨日、君のお姉さんからこの傘を借りたんだ。そこに名前が書いてあって、もしかしたら君の名前かなと思って」

俊は傘を持った手を、少し上げた。祐里は合点したようだ。

「うちのお姉ちゃんケチなところがあるんですよ。その傘、だいぶぼろくて漏ってきたでしょ」

俊はこくりと頷いた。

「昔、あたしが使ってたやつなんです。小学生くらいだったかな。もうぼろいから、新しいのを買うつて言ったとき、勿体ないとか言っちゃって、お姉ちゃんが今までずっと使ってきたんですよ」

「君のお姉さんは、物を大切にする人なんだな」

「それでも限度がありますよ。その傘だつて、かなりぼろぼろなのに、まだ使えるつて言ってるんですよ。それにこんなにぼろい傘だと、盗られる心配がないとも言っていましたね。でも雨が漏ってきたら傘の意味がありませんよね」

祐里はくすくすと笑った。それに釣られ、俊も顔がほころぶ。

「確かに。でも盗られないつてところはメリットと言えるんじゃないかな。俺は盗られちゃったから」

「少なからず、そういうやついますものね。盗られたやつは、誰かを盗つて帰る。結局、盗みの堂々巡りになるんですよね」

俊はうんうんと首を縦に振った。

桜庭から傘を借りなかったら、きっと俊も誰かの傘を盗っていたことだろう。現行犯として見つからない限り、犯人を見つけ出すのは難しい。高校生ともなれば、小学生のように傘に名前を入れる人も少ないはずだ。傘は学校で最も盗られやすい代物と言える。

「おかげで助かったよ。寒空の下、おまけに霰にうたれて帰っていたら、今頃家で寝込んでいたかもしれないし」

俊は苦笑した。

「ところで、お姉さんは？」

俊は店内を覗き見た。だが、桜庭の姿はなかった。

「さっき出かけましたよ。瓜生さんどこかに出かけるらしいです。お姉ちゃんになにか用でもあるんですか？」

「ううん、特に用があつたってわけじゃないから、大丈夫」

俊はぎゅっと胸が締め付けられるのを感じた。瓜生と、という言葉は聞きたくなかった。完全に嫉妬している。

嫉妬心は恋心と同様に、天使が持つてはいけない感情だ。天使失格だな、と俊は胸の中で自嘲した。だがその数秒後には、今更そのようなことを考える必要もないかと開き直った。天使失格なのは、今に始まったことではないのだ。

「これ、お姉さんに返しておいてもらえるかな」

俊は傘を祐里に渡した。はい、と言つて祐里は傘を受け取った。

「来年はよろしくお願いしますね、甲斐谷先輩」

祐里は軽く頭を下げた。

「え、もしかして……」

「あたしも木碕高校に通うつもりなんです」

「そうなんだ。でも俺たちの高校つて、受験人数も半端なく多くて難関校だろ。店の手伝いしてて大丈夫なの？」

木碕大学付属木碕高等学校は、県内でもかなりレベルの高い私立高校だ。私立高校では珍しく、滑り止めとしてではなく、木碕高校を第一志望として受験する受験生も少なくない。倍率は毎年高いように、かなりの難関と言える。

「模擬テストの結果よかったから、大丈夫ですよ。それにスポーツ推薦で受験するつもりです。余裕がなかったら、店の手伝いなんてしてませんよ」

木碕高校は昨年から、スポーツ推薦枠を設けている。学問においてはトップクラスなのだが、スポーツ面においては特に秀でているわけではない。文武両道に力を注いでいこうという考えなのだろう。

「なんのスポーツやってるの？」

「バレーです」

やはりなと俊は小さく頷いた。それなら彼女の背が高いのにも納得ができる。

「来年はエースアタッカーが加わるわけだ」

身長の高さからも、アタッカーがお似合いだろうと思った。

「そんな、エースだなんて……」

「祐里ちゃんを加われば、バレー部はもっと強くなるよ」

木崎高校バレー部は、ここ数年低迷しているらしい。三年生は引退し、現在のバレー部のキャプテンは藤崎だ。彼女はセッターでありながら桜庭とのコンビで、低空飛行なバレー部に勝利をもたらしてきた。その甲斐あって、最近のバレー部は右肩上がりで順調だ。

「一年生で試合に出させてもらえますかね」

「実力世界の世の中なんだし、スポーツ推薦で合格すれば、まず間違いないスタメンなんじゃないかな」

「そうですかね。あ、そう言えば、今日はこういった御用件なんですか？」

思い出したように、祐里が尋ねた。えっ、と俊は一瞬なにを問われたのかわからない顔をした。

「傘を返しに来ていただいただけじゃないんでしょう？」

「ああ、そうだ」

祐里に言われて、思い出した。話に夢中になっていて、本来の目的を忘れていた。

「クリスマスに、おばあちゃんに花を贈ろうと思ってね」

「ポインセチアですか」

さすがは花屋の娘だ。クリスマスという言葉を聞いただけで、その花を察した。俊は頷いて答えた。

「ポインセチアは時子さんの一番好きなお花ですものね」

「どうして知ってるの？」

「前に時子さんから聞きました」

「それじゃあ、赤色のポインセチアをもらえるかな」

「かしこまりました。赤色も時子さんの好きなカラーですよ」

祐里は笑顔を浮かべ、店内へと消えていった。彼女は時子のことをよく知っているようだ。

去年は、白色のポインセチアを贈ったので、今回は違う色のポインセチアを贈ろうと思ったのだ。以前、俊は時子に花のどこがいいのか、と尋ねたことがあった。時子は穏やかな表情で、

「花を見ているだけで幸せ。楽園は花が枯れることなく、いつも満開だったわ。小さな蕾を作り、花を咲かせ、花は彩り枯れてゆく。その表情が、楽園では感じ取れなかったのよ。下界に来て、その花の変化に私は惚れたの。命あるものは、言葉なくしても表情を見せるものよ」

と言った。その表情は純真で、心の底から花が好きなのだなと感じた。俊はその気持ち、今ではよくわかるような気がした。

花も人間も同じだ。命あるものは全て、その時々の変化に顕著なものである。夏に咲く花は、冬の変化に耐えられず枯れる。また夏が訪れれば、蕾から新たな花を咲かす。そうやって巡り巡る変化が楽園にはなかった。だがここでは違う。

下界には楽園では触れることのできない大切なものがある。それは命であったり、季節の巡りであったり、人との接触であったり、楽園では得られないものばかりだ。

祐里が真っ赤なポインセチアを持って戻ってきた。

「お待たせしました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7213d/>

天使の恋

2010年10月28日02時54分発行